



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 丁玲の南京時代についての覚書                                                                    |
| Author(s)        | 野澤, 俊敬                                                                            |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 29(1), 213-278                                                        |
| Issue Date       | 1981-02-28                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33444">https://hdl.handle.net/2115/33444</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 29-47_P213-278.pdf                                                                |



丁玲の南京時代についての覚書

野  
澤  
俊  
敬

# 丁玲の南京時代についての覚書

野 澤 俊 敬

- 序 章
- 第一章 食い違う証言と「陳伯祥」
- 第二章 南京時代の挫折と抵抗
- 第三章 『意外集』の世界
- 終 章

## 序 章

### (一)

丁玲の現在に至る作家生涯のほぼ半分は、強いられた沈黙によって占められている。現代中国において政治権力による弾圧を受けた作家は少なくないが、彼女ほど長期間、しかも解放前にも解放後にもペンを奪われた例は稀である。

### 丁玲の南京時代についての覚書

最初に丁玲の口を封じたのは国民党で、一九三三年から三六年にかけての三年間、彼女は沈黙を余儀なくされた。二度めは一九五七年の所謂丁玲批判で人々の視界から姿を消して以来、二十年以上もその消息は不明であった。その間、さまざまな噂が流れたが、なかには最初の失踪事件の時と同様に、彼女の生存を危ぶむものさえ含まれていた。

我国においても丁玲はもはや作家生命を断たれたとする見方が大勢を占めていた。中国の文芸界をあげての大掛かりな批判を受けたことから推して、またその際の発言者の激しい非難の口調からしても、そうした見方はごく自然な対応であった。反党分子の烙印を押されて弾劾された以上、黨員としてはもとより、作家として、いや一人の生身の存在としての丁玲に暗い想像をめぐらしていた者も多かったようである。

ところが、一九七八年十一月四、五日の香港『大公報』の方矛盾なる記者の署名記事「丁玲和她的女兒」によって、丁玲の近況と不明だった二十一年間の経歴が、大雑把にはあるが、ようやく国外にもたらされた。その後も丁玲に関する報道は続き、翌七九年春に彼女が公の場に姿を現わして発言するに至り、さらに多くの事実が明らかにになった。すでに我国にも何度か紹介されたことではあるが、意外だったのは「文革」前の丁玲に対する処遇であり、発表は許可されないまでも、書くことは認められていたことがわかった。また、一九六〇年の第三回全国文芸工作者代表大会には書面で発言していたことも確認できた。そのほか時には北京に出てきて春節を過ごし、作家協会の宿泊施設に泊まって友人を訪問することもあったという。してみると丁玲に対する所謂処分は、かつて推測されていたほど酷烈なものではなかったのであろうか。無論指摘を待つまでもなく、作品発表の場を奪われているという状態は作家としての存在理由に係わることであり、それこそ作家丁玲にとってはもつともつらい処分だったに違いない。ただ私人の推測は別の陰惨な次元を低徊していたのである。

その悲観的な推測は、丁玲批判の際に暴露された「転向」の問題に導かれたものでもあった。この問題が丁玲に対する批判全体のなかでどれほどの比重を占めていたのかは定かではないが、たとえばエドガー・スノーは、丁玲は反党的作品のためにではなく、一九三六年に南京の刑務所を釈放された経緯について嘘をついたので党を除名されたと、一九六〇年に権威筋から聞いている。<sup>(1)</sup> スノーの伝えるとおりではないまでも、「転向」の問題は丁玲が文芸界の指導的立場にある黨員作家であっただけに、決してないがしろにできなかったと思われる。そしてことが個人の内面に深く係わるだけに、追及され批判される過程で丁玲が受けた心の傷は軽くはなかったはずだ。行政的な処分もさることながら、黨員としての倫理を問われ、いや人間としての尊厳を疑われ、裏切り者として断罪されたことによって損なわれた内面は、容易に癒せなかったと思われる。「叛徒」のレッテルが丁玲の心を封じ、彼女が筆を折りしなかったか。丁玲の名を耳にするたびに、その懸念を私は止めようもなかった。

しかし、党がどのような事実を根拠に丁玲を「叛徒」と断定したのかについては、丁玲批判ののちにも詳しい説明はついになかった。丁玲自身が転向事実を認めたとは一度も聞いていない。批判に対して最初頑強に抵抗していた彼女のものには自己批判したというが、その自己批判においても「転向」の問題については語らなかったらしい。とすれば丁玲は、南京に捕われていた時期の彼女についての他の人々の見聞や、当時の一般的な政治的状況からの類推によつて「叛徒」のレッテルをはられたことになる。丁玲が転向声明を書いたとか、国民党の反共工作に加担したとか、それらのことが具体的に証明されていないにもかかわらず、丁玲を「叛徒」と非難する言葉がその後公然とまかり通り、さしたる異論の提出もなく二十年以上の年月が流れた。この間丁玲の著作は全て発禁に付され、文学史も彼女の名を反面教師的に記すのみであった。

## 丁玲の南京時代についての覚書

丁玲が復権した現在、かつての丁玲批判はあらためて問い直されるべきであり、丁玲本人も積極的に発言するべきだと私は思うが、これまでのところではあの批判は誤解による行き過ぎであったといった当たらず触らずの発言しか見られず、個々の作家の反省も中途半端の感があり、今後も多くを期待できそうにない。丁玲の過去の「誤り」も批判者側の「誤り」も敢えて蒸し返さないというのが、しばらくは中国国内における暗黙の了解事項のようである。丁玲も批判されてからの苦難の日々について語ることはあっても、批判そのものについてはあまり口を開かず、「転向」の問題に至ってはほとんど言及していない。つまり丁玲の「転向」については、我々は丁玲批判以前とさして変わらぬ状態に置かれているといつてよい。

もつとも最近出版された文学史や文学辞典のなかには、この問題に対する見解の変化を少しは反映しているものもある。たとえば一九七九年十二月に四川人民出版社から刊行された『中国文学辞典』現代第一分冊（北京語言学院『中国文学辞典』編委会編）の丁玲の項には、次のような記述が見られる。

一九三三年左聯党組書記を担当、自伝風の小説『母親』（良友圖書公司）を書く。同年反動派に逮捕され南京に監禁される。党の援助によって一九三六年に南京を逃がれて陝北に行き、中央紅軍警衛団政治部副主任を担当する。

この辞典の試行本で同じ箇所が、「一九三三年に捕えられ、三年後に出獄し、北京を経て陝北に至る」となっているのと比べると、わずかの間に丁玲及びその「転向」についての見解に動きがあったことが明らかである。だが、そ

の動きがいかなる事実によるのかは不明であり、またかつてあれほど問題とされ非難的となっていた南京での生活については不問に付されている。丁玲という作家の歴史から、「転向」の時代を抹殺しようとする文学史家は、彼女の全貌を伝えんとする意欲を欠いており、時々政治的意向なるものに沿って記述を変えているのであろう。そこにはかつて実証的批判のないまま丁玲を「叛徒」と決めつけた人々と根柢において共通する姿勢が認められる。ただ以前は問答無用式の裁断だったのが、今度は臭い物にふた式の欺瞞に変わっただけである。

私は、丁玲という作家を理解するためには、「転向」体験の検討は不可欠であると考え。国民党の特務機関に拉致された丁玲が汚辱にまみれながらも生きのび、墓場からはいあがるようにして再び自分を回復していった過程、これをぬきにしてその後の丁玲文学の展開を把握することは到底できそうにない。たとえば我国にも多くの読者を得ている「我在霞村的時候」（一九四一年）という作品にしても、南京時代の体験を持つ丁玲だったからこそ、日本兵に拉致され病気を移されて村に戻ってきた娘へ貞貞の不幸に鋭く反応し、苦悩を共有しつつ彼女を形象化しえたという側面を見落とすわけにはいかないであろう。

この覚書は、丁玲の「転向」に関する日頃の疑問を自分なりに整理しておくものであるが、丁玲の南京時代には不明な部分が多く、資料が乏しいうえに肝腎な点が曖昧なためいきおい推測が幅をきかせることはやむをえまい。これとて実証を欠いた批判の二の舞の域を出ないかもしれぬが、しかし現状の臭い物にふた式の欺瞞を見過ごすよりは、

敢えて推測をたくましくして発言することの方を自分は選びたい。

(二)

たしかに、絞首台であった。だが絞首台なら、まだましであった。あっさりとして首に縄をかけるだけなのだから、むしろ優待に属した。しかもである、誰もかれもが絞首台にのぼるわけではなくて、そのうちの何人かにはもう一つの道があった。それは首に縄をかけられた友人の足を力をこめて引っぱることである。そうしてこそ心からの懺悔が事実によって証明されるのであった。そして懺悔のできる者は、精神がことに崇高だとされたのである。<sup>(3)</sup>

これは、国共分裂後にソ連留学を終えて帰国した共産主義者を待ちうけていた運命について、魯迅が彼一流の皮肉をこめて語った言葉である。このわずか数行に、中国における転向、わけでも一九二〇年代末から三〇年代前半にかけての共産主義者の転向の特質が、見事に言いつくされている。すなわち、生を希求することが不可避免的に裏切者への転落を招くという、人間として極限的な状況の下に、中国における転向は成立した。そこではしばしば次のような直截な問いが用いられた。「二つに一つ——処刑されるか転向するか」。この踏絵のうちに、かつての同志は殉教者と背教者の群れに分かれた。

いささか唐突な引用の仕方をしたが、丁玲の「転向」にただちに取り組む前に、同時代の転向をめぐる状況について一瞥しておきたいのである。中国における転向については、これまでになどまった論考がひとつもない。中国国内においては所謂政治的配慮なるものがこの問題の全体的な論議と追及に歯止めをかけてきたし、国外にあっては信頼



するに足る関係資料の決定的ともいえる不足が障害となってきた。いまでも事情は変わってはいない。以下に述べるのは、比較的よく知られている著作によって試みた、中国における共産主義者の転向についてのささやかな見取図である。

〈革命〉と〈反革命〉とがいずれも武装し、激しく闘ぎあっていた当時の中国では、敵陣営に対する弾圧は自ずと残酷な形となって現われた。殺らなければ殺られるという暴力の論理が時代を支配していた。各地の軍閥による共産主義者の弾圧に続き、一九二七年の蔣介石による「四・一二」クーデター以後の「清党」「剿共」がいかに苛烈であったかは周知のことであり、それについては敢えて言葉を費やすまい。ただ獄中における共産主義者の処遇に関する一文だけを引くに止める。朝鮮人革命家金山が一九三〇年に北京で逮捕された時のことを述懐した言葉である。

「日本では少くとも法律がある」——と私は考えた——「釈放されるか、投獄されるか、どのくらいの刑になるかをいつでも知ることができる。だが、中国では死と自由とは紙一重なのだ。どんな風に裁判されるのかどんなつまらない証拠によられるのか、誰にも判らないのだ。もし然るべきワタリがつけられるならあっさり釈放されるし、あたりまえの人間にすぎない場合は何でもないのに処刑されてしまうのだ」。共産主義は死刑に当る罪になっていた。私はこの罪名の下に処刑された幾千人もの青年男女のことはとめて考えないようにした——かれらの中には全く無実の者が大勢いたのだった。<sup>4</sup>

実質上無法状態に近かったこの時期、転向は法の下に強制される定式化した形として成立しえず、権力側の恣意の

# 丁玲の南京時代についての覚書

下にその機会が与えられるにすぎなかった。共産主義者が捕えられることは、ほとんど死を意味したと言っても過言ではない。丁玲の最初の夫である胡也頻も一九三一年一月十七日に上海で逮捕され、そのわずか三週間後の二月七日に他の左翼作家や共産黨員ら二十三名とともに処刑されている。この事件のさなか一月三十一日に南京政府は日本における治安維持法にあたる危害民国緊急治罪法を公布し、反政府運動に対する弾圧の法的根拠をようやく整備するに至るが、その実質的対象は共産主義者で、共産主義運動に従事した者は死刑、その運動に関係した者あるいは文章、図画、演説によって宣伝した者は死刑もしくは無期懲役といった、きわめて厳しい内容であった。この苛酷な法律を背景に国民党は権力の側からの転向の論理を身につけるのである。再び金山の言葉を引く。

一九三二年になって、十分に訓練された政治警察制度すなわち「ゲシュタポ」をもつファシスト運動が、中国ではじまった。ヨーロッパのファシズムから幾多の方法を借用したかれらの活動は、なかなか効果的なものだった。その主要な戦術は、背教者となって他人を裏切ることと同意した者には自由を与え、これによって党の士気を沮喪させるというものだった。二つに一つ——処刑されるか転向するかしかなかった。<sup>(5)</sup>

反共の秘密組織藍衣社による白色テロ、破壊工作に加えて、転向者を利用した反共工作が「鼓勵自新」「利用自新」のスローガンの下に展開されるようになったのである。そのうち転向声明による反共宣伝については、波多野乾一氏の『資料集成 中国共産党史』に詳しい。

ファシストが最も攻撃勢力を集中しているのは各地の主要都市である。彼らは無産階級の本営ともいふべき中心城市に対しては、凡ゆる犠牲、凡ゆる手段を以て臨み、就中上海、北平、天津、青島、福建、広東等々の都市に全力を注ぎ、且つ革命勢力の心臓部たる指導機関の根本的破壊を目指している、且つ最近進歩的手段として効果的な裏切り者の反革命宣言を利用して大々的に反動宣伝を行うことである、即ちこの転向声明はラジオ、新聞その他の方法で革命党の威信を傷つけ、革命に対する民衆の輕蔑をそそり、同時に統治階級陣営に対する大衆の幻想をつなぎ止めようと苦心している。この方法を案出したのは蔣介石の秘書楊永泰というファシストの幹部であるが、この方法を最初顧順章に於て試みるや、逮捕された恥知らずの革命叛徒達は我勝ちに転向声明を發表し、現在に於ても転向の洪水を来している状態である。<sup>(6)</sup>

ちょうど日本において佐野学と鍋山貞親の共同転向声明がもたらしたような転向の雪崩現象が、顧順章の転向声明を引き金として起こつたのである。ただし、ほぼ同時期の日本では政治運動から身を引くことを誓約すると保釈出獄が可能であつたが、中国の場合はより具体的な利敵行為によつて生命の代償が支払われねばならなかつた。転向声明にしてもただ共產党からの離脱を宣誓するばかりではなく、公衆の面前で反共の演説をしたり国民党「三民主義」への帰依を表明するよう仕向けられるのが普通であつた。たとえば共產主義青年団の総書記だった胡均鶴ら四名の共同声明において、「中国共產党は中国革命の力となり得ないのみならず、中国革命過程に於ける最大の障害をなすものであり、同時にそれは反革命部隊中の烏合の衆にすぎず、国民革命中に於て一撃を加うべき主要なる敵である」とか、「いわゆるソビエト政權の實際的意義は、民族の利益を売らんとする道具に過ぎず、共產党が国を売らんとする道具

## 丁玲の南京時代についての覚書

ともいふべきものである」と述べているが如くである。これは党の路線に対する内部批判とは全く異質の、完全に敵対的立場からの誹謗とでもいふべきものである。波多野乾一氏が彼らの転向について、「要するに極刑を恐れて、態度を変更したに過ぎない」と指摘するように、この共同声明を支えているのは単なる命乞いの姿勢であつた。

転向声明による反共宣伝のほかに国民党は転向者に同志を密告することを釈放の条件として課していたという。<sup>(8)</sup>当時魯迅は友人曹聚仁宛の手紙（一九三三年六月十八日付）に、怒りをこめてこう書いている。「中国の青年で死んでも屈しなかつた者はたくさんいますが、しかし全て秘密にして発表しません。刑を受けて死ぬことができない時は、友を売らねばなりません。かくて堅固な者はことごとく滅亡し、ふらふらした者はますます墮落し、このまましばらくすると中国に善人は一人もいなくなるでしょう。もし中国が滅んだとしたら、それはこの政策をとつた者のせいでもあります」。死を恐れた瞬間からこうした悪質な裏切り行為までは、権力者によって一直線のルールが敷かれていたのである。具体的でしかも良心の完全な破壊を伴う利敵行為を強いられることによって、擬装転向や再転向の可能性はほとんど排除される。いわば権力に対するなしくずしの屈服が、この時期の中国における転向の大部分を占めたのである。そして転向声明のなかでいかなうな理由づけがなされようと、死に対する恐怖が変節の最大の動機であつたといえよう。

ところで注意すべきことには、中国では逮捕された者全員に転向の機会が与えられたわけではなかつた。転向は指導的インテリの一種の特権であつたのである。スメドレーの『中国の歌ごえ』のなかに、国民党特務の手を運よく逃れてきた李という技師との、次のような会話がある。

「ちょっと待って！」と、私はさえぎった。「なぜ、あなたはほかのひとちがつて、拷問されなかったんです！」

「藍衣社は、指導的なインテリにたいしては、あたらしい方法をとることにしたんです。」と、彼は悲痛な調子で言った。「刑事たちは、労働者や農民たちは殺してしまふんです。彼らには、革命よりほかには出口がありませんからね。しかし、インテリは動揺し、奴らの方に鞍がえをし、政府や藍衣社のなかで働くかもしれないということを、藍衣社はちゃんと知っているんです。もし僕たちが裏切ることを拒めば、彼らは僕たちを破壊するだけです。(後略)<sup>9)</sup>」

国民党は、指導的なインテリに対しては優遇をもって懐柔し、転向後は反共工作に従事させた。剷共同志会という転向者からなるスパイ組織が政府のテコ入れで作られ、かつての共産党の幹部は会員のなかでも高給者として迎えられた。最初に転向声明を発表して国民党に寝返った顧順章は、この会の最高幹部となっている。こうした組織の暗躍が当時の転向をめぐる状況にいつそう陰湿な翳りを添えているのである。

さて、以上手元にある限られた材料からの断片を羅列し、一九三〇年代前半までの中国における転向の諸側面を垣間見たにすぎないが、これらを念頭に置きつつ丁玲の「転向」を見てゆくことにする。

丁玲の南京時代についての覚書

## 第一章 食い違ふ証言と「陳伯祥」

### (一)

丁玲が一九三三年五月十四日に上海の租界で国民党の特務に拉致されてから、一九三六年九月十八日に南京を離れるまでの期間についての資料としては、次の五つが主なものとしてあげられる。

I 『続西行漫記』(寧謨・韋爾斯著、胡仲持他七名訳、復社、上海、一九三九年四月十五日)のなかの「丁玲——她的武器是芸術」。

II 「丁玲——新中国的先駆者」(Earl H. Leaf 著、歩溪訳、T'ion Hias 原載、『女戦士丁玲』《毎日訳報社、一九三八年十二月十五日》所収)。

III 「丁玲在陕北」(L. Insun 著、正明訳、China Today 原載、『女戦士丁玲』所収)。

IV 「The Challenge of Red China」(Gunter Stein, Whittlesey House. 1945. New York. 邦訳『延安——九四四年』・野原四郎訳、一九六二年六月三十日、みすず書房)。

V 「我和共党闘争の回憶」(著者名不明、薈蘆資料室蔵書、『中共的文芸整風』《王章陵著、国際関係研究所、一九六七年》に引用されている部分)。

このうちⅠ～Ⅳは、いずれも著者が解放区で丁玲と会見しており、南京時代については丁玲の話に基づいて、同一系統の資料と見なすことができるが、Ⅴは丁玲の逮捕と監視にあたつたかつての特務の回想録であり、Ⅰ～Ⅳとは立場、性格を異にする資料である。これらを読めば丁玲の南京における三年半のおおよその経緯を知りうるが、しかし資料間にはいくつかの食い違いがあり、なお断定を許さぬ部分が残されている。とくにⅠ～ⅣとⅤとの間には「転向」の問題に関して決定的ともいえる対立が認められる。丁玲の主張を反映している四つの資料のなかではⅠがもっとも詳しいので、これをⅤと対照させつつ論じてゆくことから始めたい。

たしかに、ひとつの状況に正反対の立場で立ち会つた丁玲と元特務の二人が、個々の事実を別々に受けとめ、それを己れの真実としたとして不思議はない。しかし、立場の違いからくる印象のズレや記憶の濃淡を考慮に入れたうえで、なおどちらかが嘘をついていると考えるほかない食い違いもある。その食い違いが丁玲の南京における生活の基本性格に係わるような場合には見過ごすわけにはいかない。

たとえば逮捕後の数日間について、二人の主張は真つ向から対立している。まず丁玲の言い分。

翌日の朝、私たち二人は列車に押しこめられて南京に送られ、やはりある旅館に監禁されました。多くの国民党員や変節した共産党員が私に会いに来ました。そのうちの何人かには会見を拒絶しました。別の数人には責め罵ってやりました。彼らは私に革命の放棄をすすめようとしたのです。私は数通の手紙を外部の同志に書きました。「私を信じて下さい、いかなる状況に置かれようとも。私は永遠に共産党を売りはしません」と。けれどもそれらの手紙は公表されませんでした。」

ニム・ウェーズの伝える丁玲のこの言葉によれば、彼女はこの時点では頑強に抵抗して非転向を貫いていたことになる。敵に対して妥協的な言動は皆無である。だが、元特務はほぼ同じ頃のことを次のように回想しているのである。

彼女が逮捕されると、私はその日のうちに彼ら夫婦（原文は「她們夫婦」）を南京に連行した。彼女は過激な破壊活動をしていたわけではなく、問題はさして重大でなかったし、それに彼女には拔群の創作の才能があったので、私は彼女が今後我党の有力な文化工作者となるよう強く望んでいた。そこで早速彼女と懇切に話し合いを進めると、彼女も過去の道を放棄したい意向を示し、あわせて書面による転向（原文は「自新」）の手続きを済ませた。<sup>v</sup>

ここでは丁玲の転向は疑うべくもない。彼女は逮捕されるとたちまち運動を放棄したことになる。ただしこの元特務の回想録は資料として若干問題がある。筆者の氏名や執筆時の身分が不明なばかりでなく、薈蘆資料室なる所蔵場所の所在や所属も明らかでない。軽視できない資料であることは確かだが、全てを鵜呑みにすることともためられる。すでに竹内実氏が指摘しているように、この回想録は丁玲を弾圧した側としてそれなりに事実を歪曲していることが考えられる。<sup>10)</sup> 引用した部分にしても、丁玲の抵抗が皆無で、あまりにもあっさりと転向の手続きを済ませていることがやはり気にかかる。それ以前に男勝りの気概をその言動にしばしばのぞかせていた彼女にしては、想像しがたい懦弱な態度である。



たとえば胡也頻が逮捕された時、終始丁玲のそばにいた沈從文が伝えるところによると、南京に行き国民党の要人に会って胡也頻の助命工作をするように勧める沈從文らを前にして、丁玲は、「從文、あなたは南京を認めるの。もし××に会うのが『投降』のためなら、私たちは南京に行く必要なんかないわ！」と言いきっている。<sup>(1)</sup>また、「私の考えはただ投降をかけあいに行くべきじゃないってことだけ。私たちは南京に条件を話しに行くだけで、これは無条件でできるはずだわ。私たちが求めているのは公平な裁きよ。もしも南京が也頻の罪を許しがたいというなら、頻の死は当然のことだし、同時にそれは自分で選んだことでもあるわ」と言ったともいう。<sup>(2)</sup>この時の丁玲には投降＝転向は問題外のことであった。主義のために死ぬこともよしとし、たとい夫の場合でもその姿勢を崩そうとしない気丈なところが丁玲にはあった。実際、それゆえにこそ彼女が拉致されて行方不明になった時に、その死がまことしやかに噂されたのではなかったか。

だがしかし、逮捕直後の丁玲の妥協もしくは屈服もありえないことではない。「転向は、歴史の軌跡の問題でもあるが、生きた人間の生き死にの問題でもある。歴史的摩擦の抵抗最大の点、そこにゴマ粒のように揉まれ、芯まで攪拌される指導者の身に眼を近づけ、その一点を拡大してみれば、ここには混沌として見きわめがたい、ひとつの完全な宇宙劇が演ぜられている。人間の偉大と卑小、高貴と醜陋がそこにある」とは、日本における転向論の古典とも言うべき本多秋五の「転向文学論」のなかの言葉であるが、文字通り死と背中合わせの状況下に成立した中国における転向が、幾多の劇烈な内面のドラマを演出したであろうことは想像するに難くない。先に見た丁玲の偉大・高貴と卑小・醜陋は、あるいは二つながら目まぐるしく転回するそのドラマの一齣であったのかもしれない。

丁玲を上海の租界のアパートから拉致したのは、波多野乾一氏によれば、国民党の特務機関のなかでもっとも野

## 丁玲の南京時代についての覚書

蜜な督察隊であったという。<sup>(12)</sup> 丁玲が秘密裏に殺害される可能性は、たしかに十分にあった。丁玲の「転向」を考える場合には、当時の苛酷な状況をふまえ、観念的な死の恐怖ではなくして、彼女が刻々身をさらしておののいたであろう死の影を常に視界に入れておかねばならない。この時、逮捕される以前の丁玲の気丈な言動からの類推は、もはや決定的な説得力を持ちえないであろう。処刑か転向かという人間存在にとってぎりぎりの二者択一を即座に迫られ、一瞬の気のひるみから丁玲が妥協的な態度をとったという推測も、少しも無理なものではない。中国には死の恫喝にも屈せず非転向を貫いて死んでいった者が少なくないが、しかし今日彼らが烈士として賞揚されていること自体、それが人間にとっていかに難しい行為であるかのひとつの証左にはかなるまい。くりかえして言うなら、丁玲がかつて唾棄していた人々の群れに自らを加えたとしても、少しも驚くにはあたらない。再び本多秋五の言葉を引けば、「おなじ人間が、ある場合には強く、ある場合には弱くしかありえない事実があるのである」から。

ともあれ、先に丁玲と元特務の「証言」を並べて紹介した逮捕直後の部分だけでは、両者のいずれが事実をより正しく伝えているかは見極めがたい。この部分はそれぞれの「証言」全体の基調を構成している部分であるのだが、具体的判断材料を欠く以上はひとまず保留し、それに続く部分についての両者の言い分を聞くことにしよう。

私たちはその旅館に二週間おり、六月一日になってようやくそこを出され、中国風の屋敷に移されました。その昔の役人の屋敷は、スパイの総司令部でした。スパイたちは早速私を虐待（「虐待」）しはじめました。けれども私の態度を変えることはできませんでした。そのようにしてひと月たつと、彼らの私に対する扱いも良くなり、本を読ませてくれるようになりました。ベッドは汚くて虱だらけでした。はじめのうち私はいたんだ食べ物が食

べられませんでした。彼らは野菜さえつけてくれなかったのです。ひどい暑さなのに着換えもありませんでした。三人のスパイと馮達が同じ部屋に暮らしていて、ずっと離れません。三人ともピストルを持っていて、いつでもそれを使う用意ができていました。夜はそのうちの一人が部屋の内外を見張っていました。<sup>1</sup>

彼ら夫婦（她們夫婦）が転向（「自新」）したのち、私は二人をまず静かな環境の旅館に住ませた。二週間して、旅館の費用がかかりすぎるので、二人を同僚の家に移して住ませることにした。そこは前朝の大官が住んでいた大きな屋敷で、庭がたくさんあった。その屋敷のなかで、對外活動の自由を除けば、彼女の起居飲食はきわめて快適なものであった。彼ら夫婦は大きな書齋に住み、外には中庭があつて、いくらかの草花が植えられていた。彼らは自由に読書閑談したり、いろいろやりたいことができ、誰も邪魔する者はいなかった。ベッドと布団、衣服に日常用品、書籍、新聞、雜誌、文房具と紙、そして盛り沢山の三度の食事、全て至れり尽くせりで、一切の費用がこちら持ちであつた。彼女自身上海で暮らしていた頃もこれほど快適だったことはなかったと言っていた。移つてきて最初の数日は、自由を失つた苦痛が当然あつたが、しばらくすると慣れてきて、だんだんと元氣になり、いつも文章を書いたり旧小説を読んでいた。退屈な時には、同居していた夫婦と話をしていた。私も時間が空くと、友人を訪ねるようにして彼らのところへ行つて話をした。

ここでも同じ時期の生活について語りながら、丁玲は非転向を貫いて虐待を受けていたと主張し、一方元特務は転向した丁玲を優遇していたと主張しており、際立つた対立が認められる。これを単なる立場の違いからくる食い違い

## 丁玲の南京時代についての覚書

とするには無理が大きく、やはりどちらかが嘘をついていると見るべきであろう。先に引いた逮捕直後の転向手続きの有無、さらにこれ以後の南京での生活についての両者の「証言」の信憑性にも係わるだけに、その嘘は看過しがたい。そこで次に、丁玲自身が南京での一時期を背景として書いた作品を傍証として取り上げ、考察を加えることにしよう。

## (二)

それは、『意外集』と題する丁玲の作品集に収められている、「陳伯祥」という短篇である。『意外集』は、趙家璧の編集による「良友文学叢書」の第三十三冊として上海良友圖書印刷公司から刊行され、初版の印刷は一九三六年十一月一日、発行は同月二十五日となっている。丁玲が南京を離れたのは、ニム・ウェールズに語ったところによれば、同年九月十八日のことである。まず上海へ行き、次に西安に赴きしばらくその地に潜伏し、解放区に向けて西安を發つたのは十月二十日である。<sup>(13)</sup>つまりこの作品集が世に出た時、丁玲はすでに解放区にいた。けれども彼女の同意の下に編集・出版されたことは、十月十一日に「自序」を書いていて、その内容から明らかである。あるいは上海滞在中に趙家璧との間で出版についての打ち合わせがなされたのかもしれない。「陳伯祥」は、この作品集の目次の順では三番目の作品であり、一九三六年の五月に執筆されたことが最近明らかになった。<sup>(14)</sup>従来とくに日本では、丁玲は南京にいた三年半何も書いていないとし、それを非転向のひとつの証とする見方が有力であったが、「陳伯祥」も含めて『意外集』の五篇は南京で書かれた作品であり、従来の見方には事実誤認が含まれているといわねばならぬ。『意外

集』全体についてはのちに述べることにし、早速「陳伯祥」の内容に入ることとする。

この作品は、かつて知りあった「陳伯祥」という男を回想して描いた人物素描であり、とりたててストーリーはなく、「私」(＝丁玲)と彼との出会いから別れまでがいくつかのエピソードで繋がれている。作者は「私」が置かれていた立場や「陳伯祥」の身分を明記することを意識的に避けたようであるが、しかし、前節の末尾に丁玲と元特務の「証言」を並べて紹介した時期の生活が背景となっていることは、注意深く読めば自ずと知られる。すなわち「私」が上海から南京に来て(実際は拉致、連行されて)ややのち、季節はおそらく六、七月頃の市街から離れたところにある屋敷の一室での生活が描かれているのである。丁玲のそれまでの生涯に、この場所と時間の条件を満たす時期はほかにはない。しかも「陳伯祥」ら三人の男が同じ部屋で「私」と起居を共にしている。この「監視体制」は、丁玲の「証言」とびったり一致する。元特務は丁玲に對外活動の自由がなかったことを一応認めているものの、三人の見張りをつけて一室に閉じこめていた事実については全くふれていないため、丁玲がいかに快適な生活を営んでいたかのような錯覚を起こしかねないが、彼女が外界から隔絶され、四六時中嚴重な監視下に置かれていたことは、この作品が如実に物語っている。

しかしながら「陳伯祥」には丁玲が語ったような「虐待」のことは何も書かれていない。丁玲の証言によれば、当然「陳伯祥」も「虐待」を加えた一人になるはずだが、作品に描かれている範囲内では「私」と彼との間に敵対的な雰囲気はなく、世間知らずのインテリと無学だが生活力旺盛な男とのやりとりには、むしろほほえましささえ感じられる。また生活全体の印象も丁玲の「証言」から受けるものとは非常に異なり、「陳伯祥」からはかなりのんびりとした暮らしぶりが窺われる。「陳伯祥」たちと一緒に閑談したり、骨牌(カルタの一種)や麻雀をしたり、刺繍をし

## 丁玲の南京時代についての覚書

たりして退屈を紛らわし、時にはお互いに酒食をふるまったりもしている。たしかに丁玲もひと月ほどして待遇が良くなったと言っているが、具体的には本を読ませてくれたことだけにしかふれず、特務たちとのそのようなやりとりについては一言もない。そのために普通の監獄とさして変わらない劣悪な生活を強いられていたと誰しも推測するが、この作品に従えばその推測は大きく修正されねばなるまい。

丁玲が他の普通の政治犯と異なる待遇を受けていたという事実は、当時の国民党の左翼知識人に対する懐柔策から見てさして驚くべきことではないかもしれない。問題はそれにいかに対応したかであろう。だが丁玲は、一度は自ら作品に書いた事実を、のちには全く語っていない。そのかわりにさまざまの「虐待」を受けたと主張している。たとえばガンサー・スタインには、「数カ月間、獄吏は夜昼となく私をおどしつけようとしていました。恐ろしいギャングと一緒に暗室にとじこめておいて、まもなく処刑されるだろうと考えさせたり、あの手この手とたえず精神的な拷問の方法をこうじました。しかし、私は動揺しませんでした」と語っている。またインスンは、「彼らはリンチで彼女を痛めつけはしなかったが、さまざまな方法で彼女を苦しめた。たとえば便器がいっぱいになってもあけることを許さず彼女に耐えがたい苦痛を与えた」という話を伝えている。丁玲が解放区で語ったこれらの話では、彼女の監視にあたった特務や獄吏は常に兇悪な相貌で登場し、彼らと一緒に閑談や麻雀などは想像もつかない。ところが「陳伯祥」には、次のようなエピソードも記されているのである。

そのうちに何人かが本格的に私たちについて勉強することになった。一人は英語、一人は中国語の読み書き、一人は小説を読むのを好んだ。彼（陳伯祥）は毎日たくさんのわからない字をたずねなければならなかった。そ

れから『法網』を一冊、彼らは買ってきた。私が読んで聴かせると、彼らは私のために言葉をかえ、もつとわかりやすいように直してくれた。

ここで「私たち」と言っているのは、自分と馮達（後述）のことであろう。彼はスメドレーの通訳兼秘書をしていたこともある。『法網』は一九三一年に上海良友圖書印刷公司から刊行された丁玲の作品集である。ところで、左翼作家が国民党の特務に文章を直されるとはいささか滑稽な話ではあるが、当の本人にしてみれば笑い事ではなかったはずだ。特務の下っ端である〈陳伯祥〉たちは社会の底辺に生きてきた者たちであり、彼らに通じない言葉で彼らの世界を描いていたことは、文学の大衆化を主張、実践してきたはずの丁玲の自己矛盾にほかならないからである。丁玲は思わぬところで民衆から隔絶していた自分を思い知らされたのである。だが、丁玲が把握していなかったのは民衆の言葉だけではない。おそらく民衆の一人一人の個性が見えていなかったのだ。そのことをあらためて丁玲に気づかせた人物、それが〈陳伯祥〉という一風変わった男だったのである。この作品は主人公の不可解で時にユーモラスでさえある言動に対する、作者の新鮮な驚きと興味を率直に綴ったものといえる。ある固定した概念から出発して彼を描くのではなく、つとめて客観的な眼で対象を把握し、彼ならではのパーソナリティを浮かびあがらせようという姿勢が認められる。〈陳伯祥〉に向けられた作者の視線は温かい。それは彼もまた抑圧された民衆の一人であるとする立場に立っているからであろう。彼に対する敵愾心は全篇を通して認められない。

彼はいつも私のために気をもみ、居心地はどうか聞いたり、私を相手に上海のことや南京の山について話すの

## 丁玲の南京時代についての覚書

であった、彼は山というものを見たのはこれが初めてで、それまで山がどんなふうであるかを知らなかったと言った。私は彼が彼自身のことと氣をもんでいるのを知っていた。彼の全身の体力が、この部屋で私との無駄話に費やされていた。私はかえって彼のためにつらかった。

こうした一節からも、丁玲と〈陳伯祥〉たちとの間に敵対関係を越えた親密なやりとりが交わされていたことが窺われる。無論、一般的には、監視する者とされる者とがそれぞれの立場をわきまえ、その上で人間的なつきあいをすることは、必ずしも責められるべきではない。だが、特務たちはあくまでも敵陣営の人間であり、多くの同志が彼らに殺されてきたことを思えば、たとえ相手が下っ端の連中であるにせよ、安易に同調的態度を取るべきではあるまい。とくに丁玲の場合、国民党が生かしておくはずがない、彼女も屈辱の生よりは潔い死を選ぶであろうとの予想が人々の間にあって、敵中における生存自体が変節の疑いを招きかねなかったから、それだけ生き方が厳しく自問されねばならなかった。党歴こそ浅いが名の知られた左翼作家として、また国民党に処刑された胡也頻の未亡人として、自分の逮捕後の言動が少なからぬ社会的影響を及ぼすであろうことは、丁玲本人も承知していたはずである。にもかかわらず丁玲は、外で同志たちが彼女を哀悼していた頃、あるいは彼女を救出するために人々が奔走し、なかでも一番熱心に運動していた民権保障同盟の総幹事楊詮が暗殺されたその頃、「陳伯祥」に自ら書いたような生活を送っていたのである。この作品は初め『国聞周报』（第十三卷第二十二期・一九三六年六月八日）に発表されており、発表時の反響についてはいまは知るすべを持たないが、これを読んで丁玲が嚴重に監視されていた事実を確認して同情した者よりは、意外に軟弱なその獄中態度に失望もしくは憤慨した者のほうが多かったのではあるまいか。



ただし、「陳伯祥」が思いのままに書けなかった作品である可能性は、作者が置かれていた状況からいって十分に  
ある。作者はねらいを民衆の一人としての〈陳伯祥〉に絞っているようであるが、彼も下っ端とはいえ特務である。  
民衆の一人でありながら民衆を弾圧する側に立っているという二重性を持っている。その二重性を描かなければ、  
〈陳伯祥〉という人物像は本当には生きてはこない。丁玲はおそらくそのことに気づいていた。この作品の末尾に、  
「この人物の輪郭は私の脳裏にはつきりと残っているが、どうやらまだ十分立体的に描き出せてはいないようであ  
る。今後機会があれば、彼のためにもう一度書いてみたい」と、この人物像に対する強い愛着を表明しているが、こ  
れは多分、彼のいわば負の側面、特務の下っ端として荷わざるをえない暗黒の部分を描ききる意図も含めての発言で  
あったと思われる。当時南京で所謂保護觀察下にあった丁玲が、監禁生活を背景に特務の手下を書くことには、やは  
り自ずから限界があったのである。いや、この題材は同時代のほとんどの作家にとって過重なものであった。例外と  
しては、作家ではないが、「獄中紀実」等を残して処刑された方志敏を知るのみである。

書かれざる部分にいささかの不満は残るものの、しかし書かれた範囲内で見える限り、「陳伯祥」からは国民党当局  
に対する追従は感じられない。きわどい題材を選びながらも終始客観的な描写を貫き権力へのおもねりを排除する一  
方で、のちの自分にとって都合がよいと思われようなこともまでも隠さずに書いている態度に、作家として人間  
として誠実なものが感じられる。そして政治的には没主観的な立場で書かれているがゆえに、この作品はのちの発言  
以上に南京時代の一時期の真実をより正確に伝えているのである。この作品を傍証として採った所以である。

さて、ここで先に引いた丁玲と元特務の「証言」をあらためて振り返って見るならば、予想していたことではある  
が、二人とも自分に不都合なことは話さないか、話してもごく簡単にしかふれていないことが明らかである。「陳伯

## 丁玲の南京時代についての覚書

「祥」との関連で見る限りでは、とくに丁玲にその傾向が著しく、この前後の「証言」の内容にも、元特務のそれとは逆の方向から事実の隠蔽もしくは誇張がなされていると考えざるをえない。実際、非転向を貫いていたという彼女の主張は、これ以後の身の処し方からしても疑う余地があるように思われる。

## 第二章 南京時代の挫折と抵抗

### (一)

南京郊外の屋敷の一室にふた月ほど監禁されたのに、丁玲は杭州の近くの莫干山に身柄を移された。丁玲は莫干山での生活についてはニム・ウェールズだけにしか話さなかったようで、他の記者は全くふれていない。そのニム・ウェールズにしても、「優遇されたが、新聞は読ませてくれなかった」という言葉しか書き留めていない。しかしその時期の生活を、元特務は次のように詳しく伝えている。

夏になると南京の気候は相当に暑苦しかった。私は彼女の環境を変えて興味を起こさせ、できるだけ早く創作力を回復させたいと思い、彼ら夫婦を杭州付近の内外に名を知られた避暑地——莫干山に護送して住まわせた。そこは気候がとても涼しく、風景が大変美しく、心をびやかにして物事を考え、著述に従事するには理想的環境であった。私が彼らのために用意した住まいは別荘風の洋式の二階建てで、ほかに部下の夫婦を旅の伴として

派遣し、上と下に分けて住まわせた。一切の経費は当然私が出していた。そのように暮して冬になり、山にしきりに雪が降って住みづらくなったので、彼らを南京に連れもどした<sup>v</sup>。

やはり監視つきの生活だったにしても、監獄とは比較にならない快適な暮らしであったことは疑いない。丁玲のここの日々のについての寡黙さは、かえって元特務の「証言」の信憑性を補強するものといえよう。

南京にもどされた丁玲は、翌春より郷里湖南から呼び寄せられた母親と一緒に暮らすという、これも異例の待遇を受けている。このことについても両者の「証言」は食い違う。元特務は丁玲の求めに応じた措置だと言い、丁玲は自分に変節を説得させるための策略であつたとし、それを拒絶していたと主張している。この部分に関しては丁玲の「証言」のほうが具体的に説得力がある。だが、事実強いられた生活だったとしても、過度の優待や異例の待遇を結果的に受け入れたことには問題が残る。なぜなら、竹内実氏が指摘しているように、国民党の優遇そのものが拷問と同じ直接的効果をねらった思想的弾圧の措置にはかならず、これに対する面従腹背的な抵抗は抵抗とみなされず、明確な拒否のみが抵抗であるという道德律が左翼陣営のなかに成立していたからである。<sup>(15)</sup> 当時の苛酷な弾圧に抗して戦っていた革命の隊列にいたずらな混乱を招くまいとする、それは同志間の默契であつた。

たとえば未完のまま残された長篇「母親」について銭杏邨が次のように述べたのも、そうした道德律をふまえ、敵中における作者丁玲の頑強な抵抗、すなわち死を予想してのことであつた。

「母親」は、形式のうえでは未完の本であるが、実際には丁玲は自らの血をもってこの本を完成したのだ。こ

## 丁玲の南京時代についての覚書

の本ほど貴く、価値のある本が、ほかにあるであろうか！ 満足したまえ、丁玲よ！ 君の血は君の筆よりも力強く大衆を教育したのだ！ 懦弱な者たちさえも君の犠牲によって自覚し、起ちあがったのだ！ ……<sup>(16)</sup>

国民党による丁玲虐殺に臆することなく、むしろそれを運動発展の契機としてとらえんとするこうした錢杏邨の姿勢は、当時の共産党員及び左翼作家に共通するものであった。白色テロが荒れ狂い犠牲者が続出していた政治的状況のなかでは、同志たちの悲観的な予想は必ずしも早合点とはいえないものであったろう。丁玲は生きながらえたことによって、しかも敵による優遇に結果的にせよ甘んじたことによって、その予想を二重に裏切ったことになる。

もとより監禁や劣悪な待遇を不当とし、待遇改善を要求することは、長期的な獄中闘争を保証するためにも必要である。だが、いざという時にはそれを撤回し、死をも辞さない覚悟を持続させていなければ、日常性のなかでいつしか抵抗力は風化してしまうであろう。南京時代の丁玲には、これまで見てきた限りでも、そうした断固たる覚悟があったように思われるが、とりわけ次に取り上げる愛人馮達との関係は、丁玲に対して変節の疑いを強く抱かしめるものである。

馮達は、胡也頻が処刑されたのち丁玲が同棲していた共産党員で、二人は同じ日に逮捕され、南京でも一緒に監禁生活を送っていた。馮達を通訳兼秘書として雇ったことのあるスメドレーによれば、丁玲を売ったのはほかならぬ「夫」の馮達であるという。スメドレーはそれを国民党特務の手から運よく逃がれてきた李という技師の話から知った。特務の隠れ家で、李は、拷問を恐れて同志を裏切った一人の男を見ていた。

「この情けない男は、ブルブルふるえて坐っていましたが、女流作家の丁玲は、今夜金三路にある自分の家で、彼女の文学雑誌の編集を手つだっている二人の作家と会合していると言いました。丁玲は共産党員ではないが、左翼であることにまちがいはない、とその男は言っていました。」

「ちょっと！」と、私は叫んだ。「その男のことをもっとくわしく話してちょうだい。」

技師がくわしく説明した男は、むかし私の秘書をしていた馮達であつた。<sup>(17)</sup>

馮達の裏切りを具体的に記しているのはスメドレーだけである。しかし、当時スメドレー以外にも馮達の裏切りを主張する者はいたらしく、その話は南京の丁玲の耳にも届いている。ニム・ウエールズに丁玲は次のように語っている。

その頃一人の友人が私に会いに来ました。彼は、私の上海の住所を売って逮捕させたのは馮達に間違いない、馮達は上海の共産党も売ったのだ、と言いました。しかし馮達は依然として私を売ったことを否認し、そして彼が知っている上海の多くの党の組織が売り渡されていないことは否定できないではないか、と指摘しました。

——それは本当でした。私は非常に不愉快になり、煩悶しました。けれどもそうした情況の下にあって、私は馮達から離れることはできませんでした。もし離れれば、私は牢獄に閉じこめられ、逃げて自由になるチャンスがなくなるからです。可能な場合には脱走するつもりでいたのです。馮達はすっかり意気消沈し、秘かに転向声明を書きましたが、それはまだ発表されていません。そこには、「私は共産党を離脱します。ここに過去の工作を

丁玲の南京時代についての覚書

悔いることを認めます」とだけ述べ、名前と住所がサインしてありました。<sup>1</sup>

馮達が自分を売ったのではないかという疑いは、上海のアパートで捕えられた際、特務に連れられて部屋に入ってきた彼を見た時に丁玲の脳裏を横切っていたが、特務たちから彼を信じるよう説得されて同居を続けてきたのであった。だが、この時再びその疑念が頭をもたげてきたのである。そして丁玲は、党の組織の件は別として、自分が馮達に裏切られたことは、どうやら事実と判断したようである。それゆえの「不愉快」であり、「煩悶」であろう。最終的に病床にあった彼を捨てて南京を離れた感情の伏線は、ここを起点としているのであろう。また馮達の「意気消沈」も、丁玲の判断を敏感に感じとったことであつたろう。

ここで黨員としての丁玲を倫理的に責めることもできよう。同志である自分を密告し、しかも獄中で転向した男との同居を継続したのは許せない。囚われ人だった丁玲に行動の選択の幅がどれほどあったかは疑問ではあるが、馮達との同居が同志たちの疑惑を呼ぶであろうことを、丁玲が予想しなかったとは思われない。脱走のチャンスを失わないためのやむをえない同居であつたと丁玲は言うが、しかし、ただそれだけの理由でこれ以後の長期間の馮達との生活が営まれたのであろうか。彼女の話だけでは釈然としない。ニム・ウェールズに語ったのが南京での体験の全てではないことは、「私は捕えられてからの全ての事実を話すつもりはありません。なぜなら現在共産党と国民党が再び連合しており、それは目下のところあまり好ましくないからです」との前置きから明らかであるが、国共合作への政治的配慮以外に丁玲の口を重くした個人的な理由があつたに違いないとするのは、すでに臆測の域に属するであらうか。

だがしかし、たとえば丁玲がどの記者にも語らなかつたことのひとつに、南京で馮達との間に子供を生んでいるという事実がある。元特務によれば一九三五年の春、女兒を出産している。<sup>(18)</sup>ここで丁玲と馮達との愛情関係の詮索に深入りするつもりはないが、この事実だけでも、黨員としての倫理だけで割り切れない感情を丁玲が馮達に対して抱いていたことは、推測するに余りある。逮捕されて以来の苦難の日々に、まず頼りとしてきたのは馮達であつたろうし、彼の子を宿して生み、彼の裏切りと転向を知つたのちも同居を続け、病気の彼を看病した丁玲に、馮達との心の絆を認めないわけにはいかないのである。黨員としては墮落した男との同居を丁玲に続けさせたもの、それは脱走のための理性の打算である以上に、日々の生活において彼と喜怒哀楽を共有した一人の女としての、ごく自然な感情の要請ではなかつたか。新たに生まれた憎しみも、その感情の流れをただちに断ち切ることはできなかったのである。しかしこれは、政治的闘争者としては取り返しのつかぬ不始末ではなかつたか。

もともと男女一緒に監禁されたこと自体、異例の措置である。丁玲の「転向」を考える場合、馮達の存在はやはり軽視できない。国民党が二人を夫婦とみなしていたことは、元特務が終始「彼ら夫婦（她們夫婦）」という言い方をしていることから察せられるが、馮達を脅迫して密告させることに成功した特務機関は、軟弱な馮達を利用し、「夫婦」の愛情をからめて丁玲の変節を誘おうとしたのであろう。おそらく、いや事実、二人の間に愛情はあつた。少なくとも世間的な眼に夫婦と映るだけの愛情はあつた。そして丁玲が妊娠してからは二人の一体感はいよいよ確かなものとされ、彼女がたとい転向声明の類を書かなくとも、裏切り者の妻としての境遇を甘受していると、国民党ならずとも思つたに違いない。時がたつにつれて当局からの制約が減り、南京時代の後半はかなり自由な行動を許されたことを丁玲も認めているが、それは彼女の抵抗のみによって勝ち取られた成果ではなかつたのである。転向後反共工作

# 丁玲の南京時代についての覚書

に従事したという馮達との同居については、当時の代表的な文芸雑誌『現代』（第六卷第三期・一九三五年四月号）の「文化界雑訊・瑣瑣屑屑」の次のような記事によって知ることができる。

丁玲の生死は、いまもなお人々の頭のなかで疑問符がついたままになっている。以前、新聞紙上に彼女が生きているという消息が載ったが、それこそ「風の便り」でしかなく、しかも不確定な語気が混じっていた。ところが、丁玲がたしかに南京にいたことを証明する事実がここにある。五日前、友人の××君自身が彼女と出会った。そのうえ一緒に中央大学図書館を見学したのである。彼女の住所はとくに秘密にされてはいないが（最近移転したとのこと）、親しい人以外には蔣という姓で通している。暮らしぶりはまずまずである。というのは亭主の馮×が某機関の職員で、聞くところでは月給が数百元もあるとのことである。しかし最近馮×は大病を患い、もはや息たえだえだそうである。彼女は久しく文章を書いていないが、書けないのだと言う。彼女がかつてのような生命力を保持しているかどうかについては、私は妄りに判断を下さない。ここに友人の言葉を引いて結びとする。「丁玲は過去と将来については一言も口にせず、ただ身辺のことだけしか話さなかった。——彼女はハイヒールをはき、皮のバッグを手に使っていた。身なりは『モダン』であったが、人のほうは少し太ったうえに老けて見えた。」（穿山甲、三月十一日、南京にて）

ニム・ウェールズに対して丁玲は、転向後の馮達については、「馮達は肺病がひどくなり、しきりに血を吐いた。冬になって彼は病院に送られ、私は一息ついた」とだけしか語っておらず、馮達が南京で「某機関」に働いていた事



実は隠したようである。馮達との関係はニム・ウェールズがわずかに書き留めているだけで、丁玲に会見たほかの記者は馮達の名前すら記していない。馮達とのことについて丁玲が口を閉ざしたのは、ひとたび口を開けばそこからどす黒い吐息が吹き出てくる予感に脅えたからではあるまいか。丁玲の南京時代には、たしかに暗い影がまといっている。

とはいえこの暗い影で南京時代を塗りこめることは、無謀の誘いを免れまい。この影の重みを確かめるためにも、次に丁玲の抵抗の跡を探る必要があろう。

## (二)

苦難のなかにある中国女性の英雄主義は、実に男の同志よりもいっそう堅固です。党の記録からは、多くの男の同志が監禁と苦難のうちに自ら罪を認めているのを指摘できませんが、しかし女性黨員はというと、いかなる苦痛や恥辱にあおうとも、ついに自分の罪を認めようとしませんでした。すでに多くの女の同志が監獄のなかで死んでおり、さらに多くが刀や銃によって処刑されているのです。Ⅱ

これはリーフが解放区で書き留めた丁玲の言葉であるが、南京における自己体験と見聞をふまえ、不屈の獄中生活を貫いた一人としての自負を背景に持つ発言とるのが自然であろう。だが、これまで主に丁玲の南京時代の影の部分を見てきたせいか、こうした言葉を素直に受け入れるには幾分抵抗があり、彼女の自負の因って来たとくもす

## 丁玲の南京時代についての覚書

ぐには思いあたらないのである。すでに述べてきた限りでは、丁玲を不撓不屈の闘士とするのは到底不可能に思われる。当時の中国の政治的状況のなかで妥協に満ちた獄中生活を選んだ丁玲は、政治的闘争者としては失格していたというほかない。丁玲と同じ頃に逮捕され、処刑されたり獄中死している者は、彼女も言うように多数おり、彼らが残酷な拷問や劣悪な待遇に耐え、敢えて死を選んだという敵愾なる事実を一方に置いて、丁玲の南京における生活を見る時、敵の懐柔策に対して断固たる主体的な対応をなしえず、ズルズルと状況の変化に追従してしまっているという印象を免れないのである。

丁玲のそうした獄中の姿勢から見て、また元特務の「証言」のその他の部分の信憑性から推して、先に判断を保留していた逮捕直後の書面による転向の手続きも、やはり事実あったことのように思われる。ただし、捕えられてからきわめて短時日のうちに完了している手続きであることから、それは所謂転向声明（悔悟書）とは異なつて転向事実を対社会的に宣言するほどのものではなく、おそらく転向の可能性を示唆する程度の形式的な手続きであつたろう。それは、平気で人を殺害する特務たち、現に同志の応修人を彼女のアパートで殺してきたばかりの連中を前にしての、まさに死を恐れる本能による屈服であつたかもしれない。あるいは秘密裏に葬られるのを避けて事件を公開の場に引き出すための妥協だったのかもしれない。いずれにせよ丁玲がのちにこのことを語らなかつたのは、たとい一時的な屈服・妥協であつたにせよ、党員としての倫理に悖る行為であると内心認めざるをえなかつたからであらう。

しかしこの最初の挫折は、丁玲のその後の細かな妥協の際に心理的抵抗を軽減する役割を果たしたであらうが、完全な屈服・寝返りを約束するものではなく、個々の重大な局面における丁玲の頑強な抵抗の可能性を排除するものではなかつたと考えられる。

とすれば、黨員としての倫理を疑われかねない妥協を重ねはしたものの、影響力のある左翼作家として対社会的に取り返しのない裏切り行為だけは犯していないという自負が、丁玲にはなおもあつたものではあるまいか。先に見たように、当時の中国における転向は具体的な利敵行為を伴うのが普通であつた。転向声明の発表や同志の密告によつて釈放されたのも、転向者によつて組織されている劇共同志会に加わり、反共工作に従事する者も少なくなかつた。ほかの作家の例から推して、少なくとも丁玲が転向声明を書くよう当局から要求されたことは疑いない。たとえば左翼作家聯盟の有力なメンバーで丁玲の親友でもあつた姚蓬子は、一九三三年末に逮捕されたが、のちに転向して釈放されている。その際は彼は転向声明を書いている。「姚蓬子脱离共產党宣言」と題するその一文は、一九三四年五月十四日、丁玲が拉致されて一年後のその日に国民党の機関誌『中央日報』に掲載され、その後国民党系の雑誌『十日談』（第三十期・五月三十日）にも載せられた。因みにその一節を紹介しておこう。

現在自分は共產党の迷夢から醒め、深思した結果、共產主義が何故に中国の到るところで行き詰まっているかの原因を、深く理解するに至つた。（中略）すなわち無産階級の独裁政治は、明らかに中国の当面必要とするものではなく、とりわけ民族の危機が日増しに深まりつつある今日、共產党の指導によつて発動せる暴動行為は、直接農村を破壊し、数少ない民族工業を破壊し、中華民族の帝国主義に抵抗する力をほとんど失わせしめ、その結果客観的にも事実の上からも完全に帝国主義の別動隊となつたのである。これこそ原則的には本来広大な大衆的基礎の上に成立するはずの党が、秘密結社のような狹隘なる状態に停滞し、その政治活動が大衆に深刻かつ良好なる影響を与えることができず、彼らの熱烈な擁護と歡迎と参加を得られないばかりか、かえつて人々に戦々

## 丁玲の南京時代についての覚書

競々たる恐怖観念を抱かしめている理由にはかならない。<sup>(19)</sup>

そして、「よって過去の錯誤を懺悔するほかに、自分は過去の政治的立場を完全に放棄し、中国共産党を離脱し、今後は断固として三民主義の旗の下に立ち、民族文化の復興に個人の力を尽くすことにし、このささやかな気持を、謹んで若い友人諸君の前に捧げるものであります」と述べて、この「宣言」は結ばれている。これを書くわずか四カ月前に、自ら編集した『丁玲選集』（一九三三年、天馬書店）の「代序——我們的朋友丁玲」の末尾に、「かくてまたひとつの荷物が我々に残された。それはまさしく死んだ戦士が残していった武器である。丁玲の不幸を悲しみ嘆息している友たちよ、涙をぬぐえ、顔をあげろ。丁玲が君たちに望んでいるのは、彼女が残していったこの困難で重い荷物を担ってゆくことなのだ」と、姚蓬子は書いていたのである。その豹変ぶりにはあきれるほかないが、おそらく死の恫喝がこの態度変更を演出したのであろう。

インスンの伝えるところでは、丁玲は南京で転向した姚蓬子に会っている。その時姚蓬子は丁玲を前にして痛哭流涕し、自分の変節の経過を打ちあけたという。Ⅲしてみると裏切りについての自己意識において、当時から丁玲と姚蓬子との間には大きな隔たりがあったことになる。

姚蓬子のほかに、穆木天の転向も当時から有名な話であった。彼の転向声明を目にした魯迅は、鄭振鐸宛の手紙（一九三五年一月八日付）に、「穆公木天も転向しました。彼は他の三人とともに献上の報告文を書きましたが、左翼をけなしてただ至らざらんことを恐れ、以前の激昂慷慨とは別人の観があります。ただ私が深く心配しておりますのは、彼がいずれまた激烈になって、我々が骨董を印刷することを重罪であると判定するのではないかということ

す」と書いている。魯迅の転向者に対する態度は実に厳しいものであったが、それは倫理的な潔癖さによる以上に、辛亥革命以前から数多くの血腥い裏切りを目にしてきた彼の、生理的ともいえる嫌悪感によるものではなかったか。

さて、丁玲の場合であるが、転向声明の類はこれまでに見つかっていない。厳しい追及がなされたと思われる丁玲批判の際にも、それらの物的証拠は提出されなかった。転向の手続きについては明言している元特務も、それ以後の丁玲の反共の文化工作に対する具体的な貢献については何も述べていない。それに丁玲ほどの作家の転向声明であれば当時注目されなかったはずはなく、話題にすらなっていないのは、それがついに書かれなかったからだと考えるのが妥当であろう。姚蓬子や穆木天のような対社会的に明確なかたちでの裏切り行為を免れたことが、おそらく丁玲の非転向の自負を支えているのであろう。

ニム・ウェールズの伝えるところでは、「悔悟」を拒絶した丁玲は、次に小説の執筆を強要されたという。「彼らはこの巧妙な方法で、私がすでに国民党に身を売ったと人々に思いこませ、左翼作家の切り崩しをもくろんだのです。私はこれも拒絶しました」と、丁玲は語っている。ほぼ同じ内容の談話を、ガンサー・スタインも伝えている。

告発もなければ、逮捕状もありませんでした。私が国民党の手先に殺されたという、上海の噂を否定するように、獄吏から要求されましたが、ことわかりました。また、国民党系の雑誌に執筆するように頼まれましたが、これもことわかりました。そういった雑誌は、左翼からの裏切者の助けをかりて、国民党の人気を高めようとつとめていたのです。しかし近代中国のすべての有能な作家が所属していた進歩的陣営に対して、テロが荒れ放題でしたから、もはや、あえて国民党を民衆によく思わせようとするような作家は、殆ど残っていませんでした。<sup>19</sup>

## 丁玲の南京時代についての覚書

やはりスタインによれば、「国民党右翼の劇作家、張道藩が、国民党のために尽くすようにと、丁玲を説得しにきた<sup>W</sup>」というが、一九三五年二月に逮捕された田漢と陽翰笙が転向し、同年七月に保釈出獄する際に身元引受人になっているのが、その張道藩である。田漢は出獄後南京と上海で中国舞台協会を組織し、自作の戯曲を上演して国民党の賞讃を受け、『中央日報』は専刊を出して大々的に報道したという。<sup>(20)</sup> また、一九三五年十月に国民党政府が設立した国立戲劇学校の教授にもなっている。この頃の田漢には面従腹背的などころがあったと言われているが、彼の意図に反して反共宣伝に利用されたという側面は否定できないように思われる。ここでも魯迅の見方を参考として引いておくならば、一九三五年八月二十四日付の胡風宛の手紙では、「田（田漢）、華（華漢、陽翰笙）両公の自由は、たしかなはずです。映画雑誌には、すでに彼らの鄭正秋に対する輓聯等（銅版で直筆）が載っております。しかし私は彼らが今後口をあまり開かず、楊邨人のようにならないでほしいと思っています」と、転向後の活動を自重するよう期待していたが、翌年二月三日付の増田涉宛の手紙になると、「林（房雄）先生の文章は遂に読まなかった、雑誌部に行つてさがしましたが売切かもうない。敵国の田漢君は頗るこの先生に類似して居ると思ひます。田君はつかまえられるが放免しこの頃は大に南京政府の為に（無論、同時に芸術の為に）活動して居ます。こうしてもかつてですが只だ正義も真理も何時も彼れ田君のからだにくついてまわつて居ると云ふのだから少しくどうかと思ひます」と、あからさまな反感を表明している。

いささか田漢にこだわつてみたのは、彼が中国の転向した作家の代表的存在であるからだが、国民党は当時、日本の侵略を契機に高揚しつつあったナショナリズムを背景に文壇の再編をもくろみ、転向した作家を自陣営に吸収して

文芸面における主導権を握ろうとしていた。一方共産党にとっても民衆のナショナリズムをいかに掌握して運動を發展させるかは大きな課題であった。一九三五年の所謂「八・一宣言」に集約された政治綱領は、その課題への現実的対応であった。抗日のための連合戦線結成の機運の盛り上がりは文芸界にも及び、「国防文学」が提唱されるに至る。これは抗敵救国を支持するあらゆる作家の結集を呼びかけたものであって、国民党系の作家や転向した作家をも排除せず、むしろ彼らを通じて国民党の陣営に統一戦線を浸透させることを最初から意図していたように思われる。田漢ら転向した作家の動きが一九三五年後半からにわかに活発になっているのは、以上のような情勢の変化を背景としている。魯迅の言葉をいま一度引いておこう。

「連合戦線」の説が提出されるや、以前に敵に投降した一群の「革命作家」が、早速「連合」の先覚者面してぼつぼつ姿を現わしてきた。敵に屈服し、内通した卑劣な行為が、いまとなつては、すべてこれ「先駆」にあたる輝かしい事業であつたかのよう<sup>(2)</sup>だ。

丁玲も外界の情勢の変化や田漢らの動きを知っていたに違いないが、彼女が何らかの対社会的活動、とりわけ作家としての活動を再開したのがいつなのか、詳しくはわからない。しかも丁玲自身は、ニム・ウェールズに次のように語っているのである。

私はソビエト区へ行って仕事をしようと思いました。けれども私の友人たちは、それをできっこない冒険だと

#### 丁玲の南京時代についての覚書

し、南京の文学界で公開の仕事が始めるしかないと思っていたのです。しかし政府は依然として私が南京を離れることを許さず、ただ私を監視下に置いておこうとします。私はそこではいかなる公開の仕事に従事するのも厭でした。自由を回復しなければ、何としても価値あるものを書けはしないと感じていたのです<sup>1</sup>。

国民党にとってみれば、一共產黨員としての丁玲の日常生活次元における墮落などは、さして有力な宣伝材料とはなりえなかった。かえって有能な作家をいたずらに潰したとの世間の非難を恐れたであろう。元特務の「証言」からも明らかのように、何よりも作家、丁玲を懐柔して自陣営に引き入れ、あるいは引き入れたと見せかけて文化工作に従事させることこそねらいであったのだ。では、その次元では丁玲が頑強に非妥協の姿勢を崩さなかったならば、一概に彼女を裏切り者ときめつけるわけにはいかなくなる。それが有名な作家であるという自分の地位に甘えた、優遇を享受しながらの抵抗であったにしても、敵がもつとも欲するものをついに与えなかったという、実質的な非転向を貫いたことになるからである。逮捕直後に転向の手続きを済ませた丁玲を、その後も長期間にわたって監禁・監視していたという、一見矛盾している元特務の「証言」内容も、丁玲の作家としての非転向を考えれば納得がゆく。

だがしかし、南京での三年半の間に、丁玲は何も書かなかったわけではない。先にも指摘したが、南京時代に創作がないとしてきた従来の日本における諸説は、『意外集』に収められた作品を見落とすという誤りを犯している。<sup>(22)</sup> ニム・ウェールズによって伝えられた丁玲の言葉から、創作活動の断念を速断したためであろうが、たしかにそうした誤解を誘うような言い回しを丁玲はしている。あるいはニム・ウェールズが正確に伝えていないのであろうか。『意外集』についてもふれてはいるが、解放区に到着後の近況を述べたあとで最後に、「一九三六年の末に、私は再び創



作を始め、最近『意外集』という新しい本を出しました」と、付け加えているだけである。

丁玲が南京で作品を書き、それを発表していたという事実は、彼女が作家としては非転向だったとする仮説に大きな疑問を投げ掛けるものである。しかしながら元特務も『意外集』の諸篇については一言もふれていないのである。それらは、彼が期待し慫慂していた国民党の文化工作者としての仕事ではなかったのであるか。ともかく丁玲が南京でいかなる作品を書いたのかを、次に見る必要がある。

### 第三章 『意外集』の世界

ニム・ウェールズやその他の記者の伝える話を、丁玲が自らの「転向」体験を陽極に引きつけて語ったものとすれば、『意外集』の諸篇は、まさしく陰極の磁場で書かれた作品といえよう。まず初出誌を付して、目次の順に作品を列挙する。

松子 『大公报』『文芸』第百三十期・一九三六年四月十九日。

一月二十三日 『十年』開明書店創業十周年紀念創作集・一九三六年七月。

陳伯祥 『国聞周報』第十三卷第二十二期・一九三六年六月八日。

八月生活 『今代文芸』第一卷第二期・一九三六年八月二十日。

团聚 『文季月刊』第一卷第四期・一九三六年九月号。

丁玲の南京時代についての覚書

莎菲日記第二部 『文学』第一卷第四号・一九三三年十月一日。

不算情書 『文学』第一卷第三号・一九三三年九月一日。

楊媽的日記 『良友图画雜誌』第七十九期・一九三三年八月号。

このうち後三篇は、逮捕される以前に書かれていた文章<sup>(23)</sup>で、作者の同意を得て「附録」として収められたものであり、『意外集』の実質的内容は前五篇に限ってかまわない。まずは丁玲自身をしてこの作品集の成立背景を語らしめよう。

「自序」の冒頭で、丁玲は以前の創作活動について自己反省をしている。時間に追われて不満足な文章を書きとばし、多忙を口実に自作の拙劣さを許したり、他人のえこひいきに甘えたりしたと述べている。おちついて創作に打ちこめる条件こそ、彼女の望んでやまないものであった。

ところが、事情が突然意外なことになる、私はある機会を得て、一切を離れ、一人で静かな場所に暮らすことになった。時間は次から次へと過ぎてゆき、なんと三年もの長きに至った。絶対的な空間があり、しかもより多くの材料が目の前にあった。だが、私は書かないで、ただ考えてばかりいた。ひたすら考えたそのあまりに、いらだちを覚えるようになった。そして忙しい合間に暇を盗んでものを書く日々が恋しくなってきた。私はすでにたくさんのことを目にしており、あるいは以前よりもましなものを書けるかもしれない。しかしそれはすぐには実現しそうなことのないようである。私が幸いにしてまだ世間の一隅に生きていることを知った何人かの知人

が、私の気持がよくわからないまま、なんとか方法を講じては、書かなければいけないとか、人々に君はもうダメになったと思わせてはいけない、起ち上がって、またペンをとるんだ、と何度も催促してきた。それは私にとつてとてもつらいことであつた。けれども結局私は、無理をして非常な不安と焦燥のなかで書いてみた。それがここに収めた数篇である。とくに「技術」に慎重に気を配つた。

検閲への気遣いから婉曲な言い回しが目立つ文章であるが、ここで見る限り、強要されて創作した形跡はない。三年間書かなかつたというから、創作を再開したのは一九三六年になってからのこととなる。すなわち『意外集』の諸篇は、丁玲が監禁を解かれて自由をかなり回復してから書かれたものであり、創作過程において政府当局によるあからさまな干渉はおそらくなかつたと思われる。「一月二十三日」が収められている『十年』は、夏丏尊の編集によるもので、当時の主だった作家、老舍、張天翼、王統照、巴金、葉聖陶、蕭軍、茅盾ら二十六名が寄稿しており、内容的にも国民党の息のかかつた創作集でないことは、明らかである。また「团聚」を載せた『文季月刊』は、前年に解散した左翼作家聯盟の流れを引く左翼系の雑誌で、当時文壇を二分して論議されていた「国防文学」論争において、「民族革命戦争の大衆文学」をスローガンとして掲げた魯迅を中心とする作家グループが、第一巻第二期（一九三六年七月号）に「中国文芸工作者宣言」を発表していることから、この雑誌のおおよその思想的傾向は察せられる。この頃の中国の文学状況を仔細に検討してみなければ、なお多くのことは断定できないが、少なくとも丁玲が国民党の文化工作者として文壇に復帰したのでないことだけは疑いない。丁玲が上海の文壇に直接復帰できたことは、当時の文学関係者が彼女に対して、田漢ら南京で華々しく再デビューした者とは別の見方をしていたことを示唆してい

丁玲の南京時代についての覚書

る。因みに『文季月刊』は第二巻第一期（一九三六年十二月号）をもって、また、「八月生活」を載せた『今代文芸』も第一巻第三期（一九三六年九月号）を最後に、政府当局からの発禁処分のため停刊している。

だが、特務から強要されての創作でなく、国民党の雑誌への寄稿でもなかったにしても、それは丁玲に作家活動を保証しているという政府当局の寛大さを世間に知らしめる行為にはかならなかった。監視下に置かれていた丁玲が何らかの対社会的活動することは、その意図とは無関係に、政治的意味を帯びないわけにはいかなかったのである。丁玲が三年間何も書かなかったのは、そのことを承知していたからである。しかし彼女は、友人たちの勧めもあって、敢えて作家活動を再開した。それが当局の無言の圧力を感じながらの創作であったのは想像するに難くない。寛大さの陰に潜む国民党の暴力的体質を、丁玲は身をもって知らされてきただけに、ペンを持つ手が萎縮したとしても無理はない。とくに気を配ったという括弧つきの技術とは、おそらくそうした当局の目をくらすための韜晦のテクニックを指すのであろう。だが、踏絵にも似た状況下で書かれた作品は、やはり満足のゆく出来ではなかったようである。先の部分に続けて、次のように述懐している。

私は、これが自分の最も不満足な作品集であると、人々に言いたい。以前にもまずいものを書いている。たとえば『自殺日記』。あれが少しでも早く絶版になればいいと、私はひたすら願っている。しかしあれを書いていた時の私には、苦痛も、圧迫も、心境との不調和もなく、ひどい出来だと思っただけだった。だが、この本は本当に不愉快だ。もう二度と読みたくない。見てのとおり、「松子」にはあんなに暗い雰囲気が充満しているし、「一月二十三日」はカットシーンだけで、こつちを撮り、あつちを撮りで、中心点がない。そして「团聚」は、

もつと……。読者がお金を出してこの本を買うのを、私は心底望まない。これをまとめたのは、自分個人の記念にするためにすぎない。私はこれから多分文章を書いてゆき、もつとまづいものを書くかもしれないが、この類のものは書かない。これは決して良い収穫ではない。疑いもなく意<sup>おも</sup>いの外<sup>ほか</sup>の残滓<sup>かす</sup>である。もし今後私がいささかなりとも成果をあげたならば、この本を批評家に研究あるいは論証の材料にもらうのもよからう。ほかの無駄話は、ここでは語るまい。

自作についての型どおりの謙遜と受けとるにはあまりに語気が強く、偽らざる悔恨の情を読み取るべきであろう。「苦痛」や「圧迫」や「心境との不調和」は、不如意な状況下での創作であつたことを物語っていて余りある。だが、丁玲が危うい立場で書いたことはわかるとして、それを承知でペンを執つた以上、状況への屈服が自墮落に作品に反映しているならば、作家としての姿勢を問われて然るべきである。「意いの外の残滓」とのちに疎んじなければならぬような作品を、それと承知しつつ書いたならば、作家としての墮落というほかない。しかし、弁解めいた丁玲の口ぶりにそれなりの本音を感じながらも、この作品集が南京を離れて解放区へ向かう過程に編まれているという事実に、作家丁玲の再起を促した要因もそこに含まれているとの期待を誘われるのである。

たとえば、すでに取り上げた「陳伯祥」における対象の把握は、ともすれば概念的、類型的な人物描写に陥っていた以前に較べて数段優れているが、それは以前の自分の作品の文章を改める場面からも知られるように、かつての自分の現実把握の甘さに対する反省の下に、この作品が書かれているからである。そしてその自己反省は、南京での様な体験によって、丁玲が作家としての眼の深まりとでも言うべき内的変化を経たことに由来するのであらう。「自

# 丁玲の南京時代についての覚書

序」のなかで丁玲は、「私はすでにたくさんのことを目にしており、あるいは以前よりもましなものを書けるかもしれない」と自信を込めかしていたが、要するにものがよく見えるようになったのである。〈陳伯祥〉はその開眼に關与した一人であり、それゆえにこそ印象深かったのである。

優れた現実把握は、若い印刷工の八カ月間の労働体験を描いた「八月生活」にもあてはまる。「報告文学試写」との副題を持つこの作品において、丁玲は自分を見習い工に仮託し、彼の現場報告の体裁を採っている。当時流行しつつあったルポルタージュ形式に興味をひかれての試みであろうか、印刷工場の様子や苛酷な労働をリアルに伝えていて、かなりの効果を上げている。この作品を書くにあたって、丁玲は実際に何度か工場に足を運んで取材したものと思われる。

それにしても社会の底辺で様々な圧迫に耐えて働く者に焦点をあてることは、当時の丁玲には勇気のいることであつたと思われる。酷使されたはてに解雇され、路頭に放り出される労働者の姿は哀れであり、この結末に至って不合理な社会現実に対する不満の色が濃い。ここで丁玲は、虐げられた者の口を借り、事実そのものの重みによって、社会の搾取構造を告発しているのである。過激な言葉はない。左連時代のような階級的観点を押し出した書きかたは影を潜め、かわって悲惨な現実を丹念に刻み込むように描いている。これは南京における丁玲の創作のひとつの特徴である。

さて、「陳伯祥」と「八月生活」の二篇は、現実を凝視し、自己の現実把握を再検討しつつ作家としての再起を図ろうとしている丁玲の姿勢を端的に示しているが、これは三年間の危機的状況をくぐりぬけてきた丁玲の現実認識の深化に由来するのであらう。その内的変化は、生と死、敵と味方、外面と内面、理性と感情とに分裂し鋭い矛盾を孕

んで生きてきた日々の自己省察にもよるものであって、自己認識の深まりが人間存在一般についての再認識を要請したのである。しかし抑圧され疎外された状況下におけるその再認識は、自ずと悲観的な陰翳を帯びざるをえなかった。比較的完成度の高い残りの三篇には、とくにその傾向が顕著である。

まず「松子」。土地を追われて貧民窟に流れついた農民の悲惨な生活を背景に、ある少年の西瓜泥棒の顛末を描いたこの短篇は、作者自身も認めるとおり作品世界が暗く、滅入りそうになるような読後感が残る。

少年「松子」はいつも飢えている。そのため彼は時々盗みを働く。その日も彼は以前からねらいをつけていた近村の関帝廟に西瓜を盗みに行く。途中であとをついてきた妹を追い返した。首尾よく獲物を手に入れるためには、妹は足手まといなのだ。関帝廟にたどりついた彼は、そこで生活苦を語り合う道士と鍛冶屋の世間話を耳にするが、いまの「松子」にはどうでもよいこと、畑の近くに身を潜めて夜を待つ。そしてついに目的を達したと思ったその時、変態癖のある鍛冶屋の小僧に襲われて驚きのあまり大声を出し、結局犬をけしかけられてほうほうの体で逃げ帰る。家の近くまで来ると、叫び声や泣き声が聞こえる。人垣をかきわけて見ると、多分狼にであらう、無惨に食い破られた妹の死体。立ちすくむ彼の耳に怒り狂った父親の声、「松子！ 松子！ あん畜生め、捕まえたらず……」。以前弟がトラックに頭をひかれて死んだ時、子守役の「松子」は父親に足腰が立たなくなるほど殴られたことがある。彼は身震いしてこっそりと人垣を抜け出し、漣しない闇のなかに立ち去る。あとには母親の号泣がいつまでも続く。

社会の底辺で互いに傷つけあいながらうごめくように生きている人々、そこからも弾き出されるかわい少年、彼には両親の愛情さえ無縁のものである。少年の不幸の背後には社会的矛盾が厚く堆積している。だが、そのことに気づくには彼はあまりにも幼く、我が身の不幸の故を問うこともなく、ふりかかってくる苦難にひたすら耐えるしかな

#### 丁玲の南京時代についての覚書

い。彼は孤独で惨めな存在である。それは、西瓜泥棒に失敗して逃げてきた時の描写によく現わされている。

彼は星を仰ぎ見た。星は冷ややかに嘲笑の眼を光らせている。いま来た方角を見れば、深い暗闇に包まれて谷間がひっそりと横たわっており、さらにその向こうの高い土塀のあるあたりには、三つの黄色い小さな燈がわびしく浮かんでいる。耐えがたい飢餓感が失せ、かわっていつそう耐えがたい肉体の痛みと、愚弄されても訴えるすべのない悲しみが襲ってきた。彼は草を枕に身を横たえた。草はすでに露で湿っていた。草の上の一匹の螢がかすかな光を頼りなげに放ちながら前を飛んでゆき、そのまま涯しない闇のなかに消えていった。彼は泣きたくなったけれども、涙が出てこない。何かを求めているような気がするが、言葉にならない。彼は勇気をふるってまた重い足をひきずり、痛みをこらえながら、びっこをひきひき煉瓦窖のある岡のほうへ歩いていった。

闇夜の荒野でこの時へ松子を捕えた孤独感、疎外感には、思考や感傷を超えて直接人間存在の本源に迫るような鋭さを覚えるが、こうした描写の根柢には、三年間の孤立した状況下で丁玲自身が感じていた孤独感や疎外感が湛えられているのであろう。

丁玲は左傾化する以前の初期の作品においても、しばしば孤独に悩む主人公を登場させた。彼らもまた社会から疎外され、閉ざされた世界に生きる人々であった。北岡正子氏が指摘しているように、「疎外から生ずるこの孤独感の深奥を一本強靱に貫いているのは、己れの存在の自律性に目覚めた自我意識」であった。自我意識が目覚めているがゆえに、彼らは夢想し、幻滅し、痛恨し、虚無的になったり、頹廢的になったり、自暴自棄に陥ったりするのであ



る。たとえば丁玲の出世作であり初期の代表作でもある「莎菲女士的日記」のヒロイン〈莎菲〉は、甘美な恋愛を夢想しながらも、強烈な自我意識の奔出によって、相手の心の、また自分の心の虚偽を許せず、情欲の世界に没入することなく、痛恨のうちに再び孤独に立ち返る。〈莎菲〉の閉ざされた内面の葛藤は、未だ開かれざる社会のなかでの覚醒した自我の悲劇であった。この時期の諸作品は、近代的自我に目覚めた若き丁玲の自我実現の強烈な欲求を、率直にあるいは屈折して反映しており、時に見せる虚無頹廢のポーズにもかかわらず、基本的には「五四」以来の個人解放の思想を体現せんとする健全なる精神に貫かれていた。その現われは、多くの場合、個我を圧殺せんとする社会への個人的反抗のかたちをとった。このうち「韋護」や「一九三〇年春上海」といった革命と恋愛をテーマとする過渡的な作品を経て、丁玲は左傾の度を増し、さらに胡也頻の死を境に左翼作家へと脱皮するのであるが、それは孤立した個人の自我実現を現実的に可能にする方途を模索追求して、ついには社会のなかで抑圧されている民衆全体の解放をそのための必須の条件と考えるに至る過程であった。かくて丁玲は社会的状況としての人間の疎外、とりわけ搾取される民衆の苦しみを階級的観点をもつて描くようになり、体制変革への志向を明確に押し出していたのである。

「松子」には、しかし、初期の作品から一貫して認められた作者丁玲の反抗的な自我の発現、自由を希求する精神の奔出は感じられない。出口のない暗澹たる作品世界は、丁玲生来の自由で反抗的な魂が抑圧された結果と考えられる。主人公の人物形象にも、それは大いに関係している。〈松子〉には自我意識の目覚めすらなく、夢想も、従って幻滅もなく、抑圧された状況下で生を求めて動物的に動き回る。実現すべき自由な自我のいかなるものかを彼は知らず、ただ突き刺すような疎外感と孤独感にその幼い魂で耐えるしかない。引用した部分でも、闇に光を吸いこまれた一匹の螢を見て、彼は直感的に自己存在のはかなさを悟るが、悲しみを涙に託すことも言葉で救いを求めることもで

## 丁玲の南京時代についての覚書

きない。南京において一種の仮死状態を強いられていた丁玲の自我の、これは素直な反映であるだろう。遣り場のない怒りが、ここでは言いしれぬ悲しみとなって沈黙し、そのまま化石する。

同様のことは、「一月二十三日」についてもあてはまる。飢えと寒さに苦しむ貧しい人々が慈善の金品を待ち焦がれて過ごす一日を、金持ち連中の安逸な暮らしと対比しつつ描いたこの短篇でも、丁玲は民衆の悲惨な生活を凝視し、それをつとめて冷静に語り、ついには彼らを闇のなかに放置するのである。

その日、一月二十三日、近所の金持ち楊家の女中の口から、楊家には慈善金が届いており、今日ほかに衣服も送られてくるという話が貧民窟に伝わり、人々はいまかいまかとそれを待つ。この貧民窟には様々な不幸が果食っている。やつとありついた職を病気のために解雇された老人、足から血を流しながら街へ物乞いに行く女たち、産後の肥立ちの悪い母親と栄養失調で瀕死の赤ん坊、役所の犬に噛まれた大道芸人の娘、そして土地を奪われた男たち。作者は淡々とした筆致で虐げられた人々の惨状を描いている。その一方で、それと対照的な裕福な連中の暮らしを織りこみ、民衆の苦しみに無頓着な彼らの利己的な本質を暴露しているが、とくにお嬢さん育ちの典型的なブルジョア婦人である楊家の太太に詳しくふれている。彼女は気性の激しい自己本位の女性であり、時々貧しい者に施しをするが、それも自己満足的な偽善にすぎず、自分一人の安らかな生活こそが彼女の最も愛するものであった。貧民への同情などとはもとと薄く、それは解雇した使用人の娘の懇願をすげなく断ったり、病気の嫁と瀕死の孫のために薬を無心に来た老婆を門前払いにしていることからわかる。また、すでに届いている慈善金を、金額が少ないという理由ですぐに人々に配ろうとしない。そういう彼女に対して、貧民窟の住人は卑屈なまでに弱腰である。せいぜい陰で不満をもらすだけである。結局その日はお金も服も貧しい人々の手に渡らず、人々は失望のうちにまた長く冷たい夜を迎え

る。ひっそりと愚をひきとった赤ん坊のために、その父親が雪の野原に墓穴を掘る音を聞きながら。

民衆の惨状を丁玲は以前にも描いたが、それは彼らが困窮のすえに立ち上る過程としてであった。「水」(一九三一年)や「奔」(一九三三年)がその代表的な例である。そこでは洪水や失業によって生活の糧を失った農民が、社会の不正や不合理に追いつめられてゆくうちに次第に本當の敵、自分たちを抑圧搾取している階級敵をつきとめ、ついには敢然と立ち向かっていった。秘めたる怨念と爆発的なエネルギーが、彼ら民衆の姿に宿されていた。だが、「二月二十三日」では、民衆は虐げられ愚弄されるばかりで、怒りはひたすら内向し、現状打開の契機となりえていない。闇に浮き出た貧しき人々の群れは、状況に何ら抗うこともなく、いつそう暗い奈落に再び姿を消してゆくのである。

無論、南京で書かれた諸篇のこうした作品世界の暗さは、まず日本の侵略下にあった当時の中国の農村経済の崩壊を社会的背景として考えるべきで、作者の心境や創作姿勢に全て帰すことは妥当ではあるまい。同時代の作家の作品には農村の荒廃を題材にした佳篇が少なくない。しかし、丁玲のこれらの作品においては、そうした社会的背景との関連は必ずしも有機的に表現されているとはいえず、作者は眼前の事象を即物的に写すばかりで、それを取り巻く社会のダイナミズムを把握しそこねている。これには丁玲が長期間にわたって現実生活を制限され、肉体的にも精神的にもきわめて限られた活動を余儀なくされていたことが、ひとつの原因であろう。閉塞した状況下で執筆された限界性から南京時代の作品はいずれも自由ではない。

だが、作品世界が狭いとはいえ、その内部における描写の迫真力には「左連」時代をも凌ぐものがあり、しかも民衆生活の悲惨さを余すところなく描いているのである。これが政府当局にとって好ましい傾向であったとは思われない。

## 丁玲の南京時代についての覚書

い。ここにはしかし、かつてのような明確な革命志向やあからさまな体制批判は認められず、内容もあまりにも暗すぎる。それは、丁玲の抑圧された作家の魂が同じく抑圧された人々の悲しみや怒りに共鳴したものの、それをただちに社会変革のエネルギーに転化して外へ噴出することがかなわぬために鬱屈し、自虐的な現われをとるほかなかったからであろう。執筆時に感じたという「苦痛」等は、ここに由来するのである。この時民衆を痛めつけることは、自分自身を痛めつけることにほかならなかった。その痛みにじっと耐えることによって、丁玲はかろうじて己れの墮落と、そして破滅を免れていたのである。

南京における最後の創作である「团聚」には、知識階級が登場していることもあって、丁玲のそうした内面の苦悩が比較的率直に現われている。

家族が再会し団円すること（团聚）は、本来幸福の象徴であるのだが、この作品では、不況の都会を追われて田舎に移り住んだ親元に、それぞれに事情を抱えた子供たちが次々と帰郷してくることになり、ただでさえ貧苦にあえいでいる一家の暗澹たる明日を仄めかして、作者は筆を擱いている。長女は亭主が阿片中毒で金策に困りはて、息子を連れ身重の体でもどってきた。長男は華北で税関の小役人をしていたが、突然辭職し、妻と子供を連れて帰ってくる途中。次男も長男の一家に同行しており、船中で神経の病気が再発し、船着場から駕籠で運ばなければならないような状態。三男は隣りの省で労働者の子弟を教えていたが、いまは解雇されて生徒の家に世話になっており、手紙で帰郷を告げてくる。彼らはみな学校を出たインテリなのだが、いずれも社会から弾き出され、傷心を抱いて親元に帰ってくるのである。

この陰鬱な作品に丁玲の挫折を読みとり、いち早く我国に紹介したのが武田泰淳であった。

かの失踪事件で日本にも有名だった丁玲女史はいつの間にか再来して『文季月刊』九月号に『团聚』の一篇を発表している。彼女の出発点は絶望的な享楽主義であった。この『暗黒の中から』（彼女の作品集の名）急激に実践行動へとふみ込んで行き、生き生きした短篇や悠々たる長篇『母親』を書いていたのである。そして失踪（検挙）。それから帰郷であった。彼女の心は燃えさかる夏から水のごとく冷えて澄む秋へ移って行く。彼女は大きな挫折をした。前途には今度こそ自己を見つめて越さねばならぬいかめしい冬がまちうけている。この現在の心境は、短篇『团聚』にいつわりなくのべられている。故郷へ帰ってきた自分、年とった父親、さらにひき続いて帰ってくる病める兄弟の事についてのべている。かくして彼女は再び「暗黒の中へ」帰来したのである。<sup>(25)</sup>

武田泰淳は作中の長女に丁玲を重ねて読んだようであるが、あるいは同時代の日本の転向文学を念頭に置いていたのかもしれない。だが、「日本の転向文学は、ほとんど大部分が作家の転向をあつかっているのを特徴としている」（本多秋五『転向文学論』）のに対して、中国の同時代の転向作家には所謂私小説的に転向体験を書いた者はほとんどいない。民族的危機に際して個人的な没落や変節の吐露が文学作品として位置を占める余地がなかったからであろう。丁玲の「团聚」にしても、作者と作中人物の間に日本の転向文学におけるような緊密な対応は認められない。

とはいえ、丁玲の当時の心境がこの作品に反映していないわけではない。全篇に漂う暗澹たる情緒については無論のこと、とくに挫折したインテリの心情を共有しうる登場人物として、三男の〈樹賢〉には注目すべきである。この作品の第三章全体は彼が母親にあてた手紙で占められているが、これは長女や兄たちに対する以上の作者の思い入れ

## 丁玲の南京時代についての覚書

を示すものであり、彼の言葉に丁玲本人の心情の流露を垣間見ることもできよう。

若く世間知らずだった〈樹賢〉は、労働者のなかで生活するうちに自分の傍観的な生き方に疑問を抱くようになり、次第に彼ら貧しい人々に近づいてゆく。ある時自分の生徒の親たちのために遅配されている給料を請求する文書を代筆し、それがもとで学校を解雇され、かえって生徒の家にやつかいになり、無力な自分を思い知らされる。しかし彼は、残酷な社会闘争のなかを生きぬいてゆく労働者、貧しいながらも他人に救いの手を惜しまない人々を知り、一度手にした信念を捨てようとはしない。そこには社会正義に目覚め、労働者のなかに真の友人を見つけた若いインテリの姿がある。全篇暗鬱ななかにあつて、この〈樹賢〉のひたむきな生き方は唯一の救いである。彼はたしかに脆弱であるが、ひたむきであるがゆえのその苦悩を嘲る気にはなれない。そしてこの誠実な挫折者に最も心を寄せていたのは、多分作者本人であつた。たとえば「私は本当に何も考えない時があります。一切の思考はただ私の苦痛を増すだけです」という言葉などは、抑圧に必死に耐えていた丁玲のほとんど肉声ではなかったか。また、〈樹賢〉は手紙のなかでしきりに「夜」に対する怨嗟をくりかえす。「……どのように話すべきなのか？ あなたに話したいことはいっぱいあるのに、話の糸口が見つからず、しかもこの恨めしい雷雨が僕の心を乱すのです。今夜、僕はどうやってこの恐ろしい夜を過ごしたらいいのか！」とか、「でも……あなたに話さなければなりません。勇気をふるわなくては。それにしてもなぜ雷雨はやまず、夜はこんなにも冷たく、ランプの燈はこんなにも暗いのか……」という具合に。これは単なる作中における情景描写に止まらず、作者を取り巻き疎外している状況を暗示してもいるようだ。さらに次のような結びの部分も気にならないでもない。

お母さん！ お母さん！ 失業中のこの不肖の息子が一度会いに帰ることを許してくれるでしょうか。僕は本  
当に帰りたいのです。そのまま暮らつつもりはありません。ただ一日でもいいのです。家でぼんやりと過ごし、  
あなたのそばにいて、あなたから生きる勇氣を与えてほしいのです！

ああ！ この長い夜はいかにしたら終わるのか。私は実際もう待てないのです。あなたのもとに行きます。帰  
ることに決めました。私にはお母さんが必要なのです！

お母さん！ お母さん！ 腕を広げて、この満身創痍の旅人を胸に抱く用意をしていて下さい。

〈樹賢〉が「夜」を呪いつつひたすら慕うのは「母」のふところであった。それは挫折者の甘えには違いないが、  
同時に生きる勇氣を甦らすための帰郷であった。「母」への回帰が安寧をもたらすとは限らないのだが、もう「夜」  
の生活は我慢できないのである。〈樹賢〉の前途に光明は保証されていない。実際、彼の親元は貧苦の極にある。お  
そらく彼は現実の厳しさをあらためて思い知ることであろう。しかし傷心の彼が帰るところは、やはりそこしかない  
のである。そして現状を打破せんとする意志を失わない限り、彼には再起の可能性がある。この作品には当時の中国  
が置かれていた状況についての丁玲の認識も反映しており、それはこの一家が「九・一八」（満州事変）と「一・二  
八」（上海事変）以後に都会を追われたとする設定からも窺われるが、一家団円と帰郷、つまり「母」なるものへの  
回帰がやむをえざる現実であり、またそこには現状打破の契機はないと、丁玲は見ていたのである。丁玲もまた、  
ナショナリズムに期待しつつあった。しかし、それは政府の要請する上からのナショナリズムではなく、どん底に迫  
いつめられた民衆が発動する下からのナショナリズムであった。それゆえ〈樹賢〉の帰郷は、自らも解放区への脱出

## 丁玲の南京時代についての覚書

を目論んでいた丁玲には必ずしも否定すべきものではなかった。否、抑圧された状況での生活（「夜」）を捨てようという丁玲の密かな決意こそが、〈樹賢〉の帰郷を演出したのではなかったろうか。この時丁玲にとって回帰すべき「母」なるもの、絶対的存在で再起のための力の源泉は党と民衆であった。中国の再生に丁玲は自らの再生を重ねようとしていた。この「团聚」の発表と相前後して丁玲が南京を離脱しているという事実、いっそうそうした推測をかきたてられるのである。この推測があたっているならば、「团聚」において丁玲は、「暗黒の中へ」帰来したと見せかけて、実は光明への道を歩き出していたことになる。

さて、以上南京における五篇の創作を大雑把に通読したにすぎないが、それでも以前の創作活動とは異なるいくつかの側面を認めることができた。とりわけ注目すべきは、現実社会の暗黒面を剔抉する筆鋒の鋭さである。三年間の危機的状況を経て現実認識を新たにした丁玲が、透徹したその眼で当時の中国の荒廃した農村や民衆の惨状をとらえた時、抑圧された暗澹たる心境ともあいまって、「松子」をはじめとする深刻な陰画の世界が生まれたのである。そこに外圧に対する屈服を見るよりは、むしろ堅固な作品世界を築いて政治的曲解を排除せんとした意図を認めるべきであろう。現実社会の不合理や矛盾の率直な指摘は、何らの反体制的言辭を伴わなくとも、政府当局には耳障りなものである。つまり丁玲は事実を執着して創作の場を確保しつつ、描き出した事実をもって体制に切り返していたのである。政府の膝下でそうした作品を書いたたたかさは記憶に価しよう。

しかし、政府当局の監視下に身を置いての作家活動には、自ずから限界があった。作家としての本来の自己を回復してゆくにつれて、ペンをとるごとに「苦痛」や「圧迫」や「心境との不調和」がつのつていったに違いない。その一方で三年間の思索と体験からくる自負あるいは焦燥が、丁玲を新たな創作へとつき動かしていたであろう。だが、



書きたいことを思いのまま書くには、保護観察下の身がただちに桎梏となる。南京での作家活動についてニム・ウェールズに語った話のうち、「自由を回復しなければ、何としても価値あるものを書けはしないと感じていた」という部分は、丁玲の本音であつた。そして無理を押しての創作に限界を痛感したことが、丁玲に南京を離れる決意を促したのであらう。してみると、『意外集』の諸篇はのちの丁玲にとっては「意いの外の残滓」と化したかもしれないが、実はその「残滓」こそ、喩えて言えば彼女の新しい人生への踏切り板だったのであり、それが腐りきっていなかったからこそ、丁玲は思いきつて跳べたのだ。

思うに『意外集』の世界を国民党に対する阿諛追従で彩ることに耐えられたならば、丁玲は南京あるいは上海に止まつて公然と別の新たな作家生活に入つていたはずだ。逮捕されてすぐにでも、それは可能なことであつた。だが『意外集』には、そうした御用作家の生活を保証するほどの作品は一篇もない。

ところが、たとえば左翼文学の指導者的存在だった魯迅は、リーフによれば、丁玲の変節を信じたまま世を去つたという。魯迅もまた、最初は丁玲の頑強な抵抗を信じていた一人であり、「悼丁君」と題する七絶を作っていることから明らかのように、彼女の生存をほとんど絶望視していた。しかし丁玲の失踪後一年半ほどのちには、「丁玲は捕えられて、生死はまだわかりません。社会のためには、生命を犠牲にすることは当然究局の目的ではありません。犠牲者というものは、みな人によって殺されたか、あるいは万一運よく生き残つた場合にも社会に悪影響があるかもしれないと、むしろ自ら望んで生命を捨てたのです」と、丁玲の生存を念頭に置いているかのような微妙な言葉を残している。自分の生命を弾圧者の恣意に委ねるのではなくして、場合によっては自ら死を選ぶこともあるとの観点に立つて魯迅は獄中の丁玲の生きざまに思いをこらしていた。敵の掌中であつて墮落した生を貪るより対社会的に意義の

#### 丁玲の南京時代についての覚書

ある死のほうに望ましいとは、過酷な弾圧の下非妥協の生を貫かんとしていた魯迅その人の自戒でもあっただろう。彼は丁玲の生存を確認してからは、「丁玲はたしかに健在ですが、これからは多分もう文章は、あるいは以前のような文章は書かないかもしれません。それが健在の代償だからです」<sup>(27)</sup>と、厳しい予想をしている。丁玲が国民党に支払った「健在の代償」を、魯迅は決して安く見積っていたのである。リーフによれば、丁玲は一九三五年の秋に魯迅の「誤解」を人づてに聞いて、悲しみのあまり昏倒したという。一九三六年七月十八日に魯迅は丁玲からの手紙を受けとっているが、返事を出した形跡はない。その手紙によっても「誤解」は解けなかったのであろうか。また、『意外集』は魯迅の死後の出版であるが、生前に丁玲の作品が彼の目にふれたとか噂となつて耳に入つた可能性はある。その後も魯迅の考えは変わらなかつたのであろうか。

たしかに、虎に出会つたなら本に登り体をくくりつけて死体さえ絶対にくれてやらぬ<sup>(28)</sup>という言葉から窺われる、魯の敵に対するすさまじいばかりの非妥協の姿勢から推して、丁玲にとっての「誤解」はついに解消されなかつたかもしれない。南京で丁玲は、死体は渡さなかつたものの、それ以外の多くのものを敵に与えてしまった。変節の疑いを抱いた者は魯迅に限るまい。

だが丁玲は、政治的次元から意識的に後退し、それに伴つて日常生活の次元では様々な妥協に身を委ねはしたものの、作家としては暫し筆を折ることによつて消極的ながら抵抗を貫き、沈黙のうちに作家としての力量を温存し、監視下における創作再開に際して作品の腐蝕を食い止めたのであり、作家丁玲をこそ自陣営に吸収せんとした国民党の目論見を、最終的にあざやかにかわしたのだといえまいか。汚辱にまみれながらも最後の一线だけは踏み越えなかつたという、とりわけ作家としての自負が、ほかならぬ共産党への回帰、解放区への脱走を丁玲に可能ならしめたの

だと、私には思われる。

## 終章

南京における三年半の生活で丁玲が心に深い傷を受けたことは、想像するに難くない。強いられて余儀なく送った日々であつたにしても、その間に己れの脆弱さが露呈し、心ならずも幾つかの妥協を重ねたことは否定しようもなかった。それゆえ丁玲は、解放区に着いてから南京時代のことをありのままに語ろうとはしなかったようである。記者たちが伝える彼女の談話には、多かれ少なかれ事実の誇張や隠蔽がある。しかし国共合作が成立し、国民党統治区と人的交流が盛んになるにつれて、丁玲の心の傷口を逆撫するような噂がささやかれることもあつたに違いない。たとえば丁玲と馮達との関係は、解放区でも半ば公然の秘密であつたろうから、周囲の人間の臆測から丁玲が自由であつたとは思えない。丁玲が「重逢」という戯曲を書いたのは、おそらくそうした空気のなかにおいてであつた。

南京時代の体験が投影されているとこれまでもしばしば指摘されてきたこの作品は、丁玲が中心となつて組織した西北戦地服務団の戯曲の編集会議で、捕虜になつた場合どのように新しい工作を展開すべきか、というテーマを与えられて書かれたという。<sup>(29)</sup> 南京を脱出してから一年も経っていない自分にことさらそのテーマが充てられたことは、丁玲にしてみれば南京時代の自己弁明を求められたものと同じであつたろう。あるいは自ら望んだテーマであつたかもしれない。というのは、丁玲が敢えて主人公をインテリ女性とし、大胆にも自分の過去を彷彿とさせるような状況設定にしているからである。しかもヒロインの名前へ白芝(Bai zhi)は、丁玲の本名冰之(Bing zhi)やペンネーム賓

# 丁玲の南京時代についての覚書

芷 (Bing zhi) 彬芝 (Bin zhi) と近似しているうえに、作品の後半に登場する「白芝」の恋人の「馬達明」という名前も、馮達の名前を容易に連想させるではないか。明らかに作爲的な命名であり、丁玲と馮達との関係を知っている者ならただちに南京時代を想起するように仕組んだのである。そうした作品において、丁玲が偽装投降の問題をあつかっているのである。

日本軍の特務機関に捕えられた作業員「白芝」は、脱走が不可能と知るや、死を覚悟して敵に襲いかかろうと待ち構えていた。そこに意外にも三人の同志が連行されてくる。同志たちは生きていた「白芝」に変節の疑いをかける。それに対して彼女は、「ああ、私は死にたかったのよ。恐れはしなかった。でも奴らは殺しに来なかった。私は拷問を受ける覚悟もしたわ。きつとひと声だつてうめかなかったでしょう。でも奴らはやっぱり来なかった」と悲痛に訴える。同志たちは「白芝」を信じ、生存の可能性のある彼女に、偽装投降して「桃色間諜」になるよう説得する。女性としての肉体的汚辱に耐えて生きのび、工作を継続せよというのである。死ぬほうがましだと峻拒する「白芝」に対して、同志の一人は、「しかし我々はチャンスを見つけて生きてゆくべきだ。なぜなら生きてさえいれば、中国のために、人類のために、きつと何かやれるのだから、個人がしばらくの間誤解され、少しぐらい思いをしたって、そんなことはたいしたことないじゃないか」と、大局的な見地に立つて考えを述べる。なおも同意をしる「白芝」であったが、ほとんど目の前で三人の同志が虐殺されるに及んで、復讐の念に燃えながら偽装投降を決意する。以上が「重逢」の前半のあらすじであるが、ここには丁玲自身が獄中でくり返したであろう反問が、ほとんどそのまま提示されている。捕えられて敵に殺されなかった、拷問にもかけられなかった、それは「白芝」(＝丁玲)の罪ではない。また、死は究局の目的ではなく、意味ある生存の可能性を追求すべきだとする同志の言葉にはそれなりの

説得力があり、従つて偽装投降（＝偽装転向）は肯定されていい。丁玲の自己弁明は半ば以上成功したかのようである。だがしかし、言葉は行為で裏付けられねばなるまい。偽装の内実がここで問われる。潔い自己滅却に代わるに足る存在理由を、はたして「白芝」はその後の偽装工作によつて維持しえたかどうか。作品の後半を見てみよう。

一人敵中に残された「白芝」は、同志と衛兵が乱闘した時に誰かが落としていった短刀を見つけ、それをふところに隠す。日本軍の特務機関の部長が部屋に入つてくると、彼女は早速ただの村の娘だと偽つて命乞いをする。美しい彼女に男心をそそられた部長は、中国人の部下「馬達明」に説得をまかせて立ち去る。「馬達明」と「白芝」は恋人同志であつた。二人は一年以上も会えなかつたが、意外な場所で再会（「重逢」）したのである。「馬達明」が敵に潜入している逆スパイであることに気づかない「白芝」は、彼の言葉を誤解し、怒りに駆られて短刀で彼を突き刺してしまう。深手を負つた「馬達明」は、自分の正体を明かし、味方への情報を彼女に託し、裏口の鍵をわたして脱出を促す。「白芝」は激しく動揺するが、結局彼の言葉に従い、いつまでも変わらぬ愛を誓つて脱走する。

ヒロイン「白芝」は終始正義の体現者であり、しかも偽装投降を決意したものの少しの汚辱にまみれることもなく救われる。つまり偽装投降にまつわるであろう影の部分は捨象され、理念としての正当性だけが印象づけられる構造になつてゐるのである。かくて「白芝」から連想される丁玲は全く傷つかない。だが南京における現し身の丁玲は、すでに見てきたように、無傷だつたわけではない。丁玲が外面的妥協によつて内面の非転向を保証しようとしたことを否定するつもりはない。おそらく丁玲には偽装転向の意識があつた。しかし、政治的闘争者としては、その外面的妥協に見合うだけの何らかの仕事をなしたかは疑わしく、ブルブルと状況に押し流されてしまったというのが実態ではなかつたか。そうした自己の蹉跌は、己れの過去を想起させるよう仕組まれたこの作品から一切排除されている。

## 丁玲の南京時代についての覚書

「重逢」のモチーフを作者個人の自己弁明に発しているとする見方を前提としてさらに言うならば、この作品には南京における丁玲と馮達との関係も投影されているように思われる。先に述べた名前からの連想に止まらず、両者の敵中での立場、脱走の経緯も南京での二人のそれに近いのである。無論、〈白芝〉も〈馬達明〉も作者によってデフォルメされているように、とくに馮達を正義を全うした逆スパイに重ねる無理は、丁玲も感じていたに違いない。だが、丁玲が馮達のことを書いたのは、単に自己弁明のためだけではなかったのだ。

丁玲にとって馮達は、自分を密告した憎むべき男であった。その憎しみは、恋人〈馬達明〉を刺した時の〈白芝〉のそのように、深く激しいものであった。しかし馮達はまた、敵中に二人孤立して、たしかに愛情と呼べる感情を分かちあつた男でもあった。そして裏切り者の彼の「妻」でいたことが、最終的に丁玲の脱走を可能にしたのである。それは別れるために営まれた皮肉な愛の暮らしであった。国民党が二人を夫婦とみなしていたこともあつて丁玲に対する態度を軟化したとすれば、結果的に明確なたちでの転向を自らは免れた彼女の心に、馮達への軽蔑の念とともに何かしら負い目のようなものが宿っていたと考えられる。また、長く病の床にあつた馮達を残して丁玲が逃走することはよもやあるまいとの予想が、おそらく監視する側にあつたと思われるが、その裏をかいて逃走した丁玲は、あとに残されつらい立場に立たされたであろう馮達のことを、はたして何の感慨もなしに思い出せたであろうか。あるいは事前に逃走の決意を馮達にだけは打ち明けていたのかもしれないが、そうであればなおのこと、黙って捨石になつてくれた彼に対する思いには複雑なものがあつただろう。「重逢」には、馮達とのそうした愛と憎しみの錯綜した過去が投影されているのであり、この作品を書くことによって、丁玲は馮達との訣別を秘かにはたしたのである。

さて、「重逢」が丁玲の南京時代と深く呼応していることは疑いないが、この作品からも窺われるように、丁玲は

自分の過去に關して必ずしも正直ではなかった。その暗い部分は遠慮なく裁断し、周到に再構成して人々に語った。他人の心ない中傷を一時的に斥けるには、それで十分であった。しかし語られずして押しこめられた一群の真実が、黒くわだかまって彼女のなかに残ることになった。解放区で精力的に仕事をしている丁玲の姿にその翳りを認めることは容易ではないが、たとえば一九三八年の西北戦地服務団を率いて臨汾に來た時に、作家仲間の蕭軍に次のように孤独な心情を打ち明けているという。

私はいま……何も考えない……私は自分の魂が生き返ることを避けている……私には子供がおり、母もいる、でも私は何も考えない……私が考えるのは、ただ仕事、仕事、仕事……の中から私に必要なものをすくい取るの……。私には家もなく、友達もない……自分に属するものは何もない、あるのはただ同志たち……我々の「党」……私は文学の仕事にもどるのがこわい……あんな孤独な責め苦には耐えきれなくなりそうだわ……<sup>(30)</sup>

この言葉の背後には、三年半の南京での生活が深い溝となって横たわっている。過去をふり返る心の余裕を恐れ、丁玲はひたすら仕事に打ちこむ。そこには新たに生まれ変わろうと懸命に生きながらも、なお断ち切れぬ過去に苦悩するひとつの魂があった。

文学の仕事について蕭軍に苦痛を訴えていた丁玲ではあるが、当時彼女のペンが止まっていたわけではなかった。しかし、この言葉が吐かれた一九三八年には、戯曲「河内一郎」を除けば、本格的創作とは言いかねる身辺雑記風の短文がほとんどで、小説の創作は一篇もない。周知のように丁玲は処女作以来その力を専ら小説に注いできた作家で

## 丁玲の南京時代についての覚書

ある。彼女のいう文学の仕事とは、小説の創作とほぼ同義であった。思うに解放区の現実を把握するためにも、また魂の傷を癒すためにも、丁玲には暫しの時間が必要だったのである。

「重逢」に認められた暗い過去に由来する一種の秘密主義は、しかし、その後の作品にも尾を引いている。「どんな人にも、ほかの人には話したくない心の奥に深くうずめていることがあるもので、これは個人の感情に属すること、はたの人には何の係わりもないし、またその人個人の道徳にも関係のないことなのだ」とは、「我在霞村的時候」における作者の分身ともいえる〈私〉の述懐であるが、「感情」に属する秘密を「道徳」的判断から隔離せんとする心理的傾向は注目すべきである。この作品では、「永久に彼女（貞貞）の秘密にふれまい」とする〈私〉の姿勢が、「全ての人にわかってもらえないことだつてあるんです」という〈貞貞〉の頑なな態度と表裏一体となってひとつの暗い過去を防護している。これらを世間でいう人情の機微と一応解してかまわない。しかしそうした人情の機微の内面をこそ探るのが文学ではないのか。自身の体験と酷似した題材を前にして、丁玲はここでも及び腰であった。作品の世界に昇華するには、なお傷が生々しすぎたのである。

だがしかし、過去の蹉跌が作家に掛け替えない財産をもたらすことがしばしばある。南京における特異な体験を通じて丁玲のものとなった、人間存在についての新たな認識あるいは作家としての眼の深まりは、解放区での創作に「左連」時代とは明らかに異なるリアリズムをもたらしした。たとえば「中国の現代文学のなかでも、数少ない完璧な短篇のひとつである」<sup>(3)</sup>と岡崎俊夫に絶賛された「夜」（一九四一年）におけるしたたかな現実把握は、南京での創作で確立した現実凝視の姿勢をぬきにしては考えられない。だが、その現実の暗黒面にも鋭敏となった作家の眼のゆえに、丁玲は政治的批判を免れなかったのではなかったか。されば、従来ほとんど無視されてきた『意外集』である



が、作家丁玲のその後の栄光も悲慘も、この作品集と、そしてそれを生み出した南京時代にこそ潜んでいたのだといえまいか。

(一九八〇年十月)

# 註

- (1) エドガー・スノー『中国の赤い星』増補改訂版(松岡洋子訳、一九七二年、筑摩書房)の「略伝」の丁玲の項。
- (2) 『中国文学辞典』現代第一分冊(北京語言学院『中国文学辞典』編委会、一九七九年七月、香港、文化資料供應社)。
- (3) 魯迅「中国文壇上の鬼魅」一九三四年十一月二十一日、『且介亭雜文』所収。
- (4) ニム・ウエールズ『アリランの歌』(安藤次郎訳、一九六五年、みすず書房)。
- (5) 同(4)。
- (6) 波多野乾一『資料集成 中国共産党史』第四卷(一九六一年、時事通信社)。
- (7) 波多野乾一氏前掲書第二卷。
- (8) たとえば金山はニム・ウエールズに次のように語っている。「藍衣社は、裏切る共産黨員全部にたいして、かれら自身
- (9) の釈放を確実にするために少くとも他の二名の黨員の逮捕の手引きをせざるをえないように仕向けていた」(『アリランの歌』前出)。
- (10) アグネス・スメドレー『中国の歌ごえ』(高杉一郎訳、一九五七年、みすず書房)。
- (11) 竹内実『現代中国の文学・展開と論理』(一九七二年、研究社)。
- (12) 沈從文『記丁玲・続集』(一九三九年、上海良友復興圖書印刷公司)。
- (13) 同(6)。
- (14) 丁玲「最後一頁」一九三七年七月十一日、『一顆未出鎗的槍彈』(一九三八年、生活書店)のあとがきによる。
- (15) 袁良駿「丁玲著作年表(一九二七年秋——一九四九年十月)」、『新文学史料』一九八〇年第三期による。
- (16) 竹内実「丁玲批判について」、『東洋文化研究所紀要』第二十五号(一九六一年十月)所収。

丁玲の南京時代についての覚書

- (16) 銭杏邨「關於『母親』、『現代』第四卷第一期（一九三三年十月）に發表。
- (17) 同（9）。
- (18) 方矛の「丁玲和她的女兒」（前出）では、丁玲の娘の名前は蔣祖慧で、一九三四年に生まれたことになっている。どちらが正しいかは未詳。
- (19) 『魯迅研究資料』二（一九七九年三月、爾雅社）に再録されたものより訳出。
- (20) 復旦大学・上海師範大学中文系選編『魯迅書信選』（一九七三年、上海人民出版社）の「注釈」による。
- (21) 魯迅「半夏小集」、『作家』第二卷第一号（一九三六年十月十五日）に發表、『且介亭雜文末編』附集に所収。
- (22) 唯一の例外は宗像（田畑）佐和子氏の「『丁玲について』について」（『柿の会会報』二十五号、一九六三年一月二十日）である。これは氏の修士論文をまとめたものとのことだが、もとの論文を読む機会は残念ながら持てなかった。
- (23) 「莎菲日記第二部」は丁玲が書き残した草稿、「不算情書」は実際に出すつもりで書かれた手紙であるらしく、執筆の時期は一九三一年から三二年にかけて、おそらく丁玲の友人が哀悼の意をこめて雑誌に發表したのであろう。
- (24) 北岡正子「丁玲文学における『革命』の誕生」、『東洋文化』第五十二号（一九七二年三月）。
- (25) 武田泰淳「昭和十一年における中国文壇の展望」、『支那』一九三七年一月号。
- (26) 一九三四年五月一日付婁如暎宛書簡。
- (27) 一九三四年九月四日付王誌之宛書簡。
- (28) 魯迅「兩地書」、一九二五年三月十一日付書簡。
- (29) 「河内一郎」後記、「一年」（一九三九年、生活書店）所収。
- (30) 蕭軍『側面』（一九四一年二月）。訳は秋山洋子「あたりの女流作家」、『革命の中の女性たち』（一九七六年七月、評論社）によった。
- (31) 岩波文庫『霞村にいた時』あとがき。